日本生態学会
ニュースレター
No.16
2008年9月

［目 次］

第 56 回 日本生態学会大会案内 1

記　事

Ⅰ．55 回大会総会、全国委員会、各種委員会報告承認決議事項 7

A．報告事項

B．承認事項

C．決議事項

Ⅱ．第 55 回 日本生態学会大会記録 16

Ⅲ．書評依頼図書 20

Ⅳ．寄贈図書 21

Ⅴ．後援・協賛 21

お知らせ

1．公募 21

書　評 22

日本生態学会役員一覧 25

京都大学生態学研究センターニュース 29

第 56 回 日本生態学会大会案内 -2

第 56 回 日本生態学会大会（公式略称 ESJ56）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。この案内は、前回のニュースレター掲載の案内の内容に、大会日程、参加申込・諸経費の納入方法、各種締め切りの情報を加筆したものです。前回からの変更はありません。また、最新情報は大会公式ホームページ（http://www.esj.ne.jp/meeting/56/）でご確認ください。

大会の概要と参加申し込み

本大会では、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭･ポスター）、企画集会、自由集会、総会、受賞講演会、懇親会を行います。企画集会、自由集会につきましては、**「企画集会と自由集会」**をご覧ください。

大会参加、一般講演、企画集会、自由集会の申し込みは、大会公式ホームページを通じて行って下さい。大会参加、一般講演、企画集会、自由集会の申し込みは、2008 年 9 月 29 日（月）から受付を開始する予定です。詳細については、申し込みの流れの項を参照ください。講演要旨の登録は、大会公式ホームページで 2008 年 12 月 15 日（月）から受付ける予定です。

本大会は、日本生態学会員ではない方も参加できます。ただし、一般講演を行ったり、シンポジウム等の企画提案をするには、日本生態学会員になっていただく必要があります。本大会での講演・企画のためには、2009 年度の会員であることが必要です。現在未入会の方は、大会参加申し込みと同時に入会申し込みを行い、2009 年 1 月末までに会費の納入を済ませてください。入会手続きについては http://www.esj.ne.jp/esj/ を参照していただくか、下記事務局までお問い合わせください。

〒 606-8148　京都市北区小山西花池町 1-8
日本生態学会事務局
TEL & FAX: 075-384-0250　E-mail: kaiin@mail.esj.ne.jp

大会プログラムは、2009 年 2 月頃に日本生態学会員全員に郵送されることになっています。ただし、会費未納の場合はその限りではありませんので、プログラムの郵送を希望される会員は、必ず年内に会費を納入してください。

非会員には、事前に参加申し込みをしても、大会プログラムは郵送されません。2009 年 2 月頃に大会公式ホームページで公開予定のウェブ版のプログラムと当日会場でお渡しする講演要旨集をご利用ください。

会場・日程

本大会は岩手県立大学を主会場として 2008 年 3 月 17 日（火）から 21 日（土）に開かれます。主な日程は下記の予定ですが、シンポジウム、集会の数によって変更されることがあります。詳細はプログラム、公式ホームページで、追ってお知らせしますので、確認ください。

3 月 17 日（火）　岩手県立大学　各種委員会、一般講演（ポスター）、企画集会、自由集会
3 月 18 日（水）　岩手県立大学　シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会
3 月 19 日（木）　岩手県立大学　シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会
3 月 20 日（金）　盛岡駅西口複合ビル（マリオス、アイーナ）　総会、授賞式、受賞講演、公開講演会、自由集会
　　ホテルメトロポリタン NEW WING　　懇親会
3 月 21 日（土）　岩手県立大学　シンポジウム、一般講演（口頭）、企画集会、自由集会

申し込みの流れ

本大会では、大会運営の省力化のため、諸経費の徴収をJTBに委託します。参加者は、原則として、学会が運営する大会登録システムと、JTBが運営するJTB Multi Entryの2つのシステムに入り、参加申し込みと支払い手続きをする必要があります。

1. 最初に、大会公式ホームページにリンクする大会登録システムで参加申し込みをしてください。
   講演要旨登録には、発行される大会登録番号と参加申込時に決めていただいたパスワードが必要ですので、忘れずに記録しておいてください。

2. 次に、ホームページにリンクするJTB Multi Entryに進んで、必要事項を登録しIDを取得してください。その後、JTB Multi Entry上に作成される個人ページから指示にしたがって支払手続きを行ってください。
   宿泊・旅行の申し込みおよび**講演要旨登録にJTB Multi Entryで取得したIDも必要です**ので、忘れずに記録しておいてください。
   本大会では参加費前納者の受付けをスムーズに行うため、希望者には名札・領収書・要旨集引き換え券等を事前に送付します（参加費・学会費を支払い済みの方に限ります）。詳しくはJTB Multi Entryにある「参加募集要項」等をご覧ください。

3. 宿泊・旅行の申し込み
   JTB Multi Entryで取得したIDを用いて宿泊・旅行の申込ができます。詳しくは後述の「宿泊・交通案内」の項目をご覧ください。

諸経費の金額と支払い方法

大会参加費（講演要旨集の代金を含む）

2009年2月20日（金）まで	：一般	会員7,500円、非会員8,000円
	学生	（会員・非会員とも）4,500円
大会当日	：一般	（会員・非会員とも）10,000円
	学生	（会員・非会員とも）7,000円

懇親会費

一般会員6,500円、一般非会員7,500円、学生（会員・非会員とも）4,500円

講演要旨集のみ　3,000円（大会終了後に送付します）

＊会員とは2009年度に日本生態学会会員である方を指します。大会参加申し込みの時点で非会員であっても、同時に入会申し込みを行い、2009年1月末までに学会費の支払いを済ませた方には、会員の金額が適用されます。

支払い方法には、クレジットカード決済とコンビニエンスストア決済があります。コンビニエンスストア決済の場合、後日、郵送される払込用紙を使用して支払をしてください（払込用紙には有効期限がありますので、ご注意ください）。詳細は、大会公式ホームページとJTB Multi Entry内の「お支払いについて」を参照してください。

なお、大会参加費の公費支払いを希望される場合は、JTB Multi EntryでIDを取得した後、11月28日（金）までに個人ページトップにある「問合せ」からその旨を御連絡ください。その際、支払い手続は行わないでください。

納入された大会参加費・懇親会費はお返ししません。欠席された方には大会終了後に要旨集を送付します。懇

親会は定員に達するまで募集しますので、大会参加費支払い後、追加することもできます。

申し込みなどの締め切り

各種申し込みの締め切りは以下の通りです。

企画集会、自由集会申し込み	2008 年 10 月 24 日（金）17:00
一般講演申し込み	2008 年 11 月 14 日（金）17:00
講演要旨登録	2009 年　1 月　9 日（金）17:00
大会参加の事前申し込み	2009 年　2 月 20 日（金）17:00
JTB Multi Entry の ID 取得と支払手続き	2009 年　2 月 20 日（金）17:00

なお、企画集会･自由集会および一般講演の申込には、大会参加申し込みを済ませていることが必要です。また、講演要旨の登録には、大会登録番号、**パスワード、JTB Multi Entry の ID** の 3 つが必要です。したがって、要旨を登録する講演がある方は、早めに JTB Multi Entry の ID 取得と支払手続きを行ってください。

JTB Multi Entry の参加申込ページは 2009 年 2 月 20 日（金）17:00 以降は利用できません。**締め切りまでに送金されなかった場合、大会当日の支払いとなり、当日参加の金額が適用されます。**

一般講演の申し込み方法

一般講演を希望する場合は、登壇者（ポスター発表の場合は主たる説明者）が大会参加申し込みとあわせて講演のタイトルと著者名、所属を登録してください。締め切りは **11 月 14 日（金）17:00** です。講演登録時に、口頭発表かポスター発表かを選んでください。ただし、会場の都合でご希望に添えない場合もあります。

口頭発表では、英語での発表･討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。英語での発表については、講演申し込み時に「英語セッションでの発表を希望」と「特定分野での英語発表を希望」の選択肢を提供します。

若手の優秀なポスター発表にはポスター賞を授与します。詳細は、ポスター発表の方法の項を参照してください。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申込時に適切な分野を以下のうちから 3 つまで選んで下さい。ポスター発表希望数が 5 件に満たない分野については、それらの発表を第 2、第 3 希望の分野に振り分けることもあります。

1. 群落	2. 植物個体群	3. 植物生理生態	4. 植物繁殖
5. 植物生活史	6. 送粉	7. 種子散布	8. 菌類
9. 微生物	10. 景観生態	11. 遷移・更新	12. フェノロジー
13. 動物と植物の相互関係		14. 進化	15. 種多様性
16. 数理	17. 動物群集	18. 動物繁殖	19. 動物個体群
20. 動物生活史	21. 行動	22. 社会生態	23. 分子
24. 古生態	25. 保全	26. 生態系管理	27. 外来種
28. 都市	29. 物質生産	30. 物質循環	31. 生態学教育・普及
32. 英語（口頭発表のみ、専門分野は不問）			

注意：

・一般講演の演者（登壇者及び主たる説明者）は、日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。

・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。

・さらに、**シンポジウムの企画者・講演者は一般講演は行えません**（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、

いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承ください。
・学会費滞納者、大会参加費未納者は発表できません。早めの払い込みをお願いします。

口頭発表の方法

一般講演の口頭発表は、会場備えつけの設備を使用したマイクロソフト・パワーポイントあるいは PDF による発表とします。持ち込みのコンピューターは使用できません。発表用ファイルの登録方法などは現在検討中です。詳細は、大会公式ホームページで追ってお知らせします。

ポスター発表の方法

ポスターボードは縦長の 90 cm × 210 cm のものを使用する予定です。

日本生態学会は、若手研究者を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の対象は発表者が若手でポスター賞に応募した発表に限ります。ポスター賞は「若手研究者を奨励するため」であることをご理解のうえご応募ください。ポスター賞の運営、審査は前回大会に準じて行う予定です。詳細は大会プログラムに掲載しますので、ポスターを準備するときに参考にしてください。

発表用の図表の配色に関するお願い

日本人男性の約 5%が赤や緑の混じった特定の範囲の色について、差を感じにくいという視覚特性を持っています。このような状況を踏まえ、岡部正隆氏（東京慈恵会医科大学解剖学講座）と伊藤啓氏（東京大学分子細胞生物学研究所）が「色に関するバリアフリー・プレゼンテーション法」の普及をすすめています。岡部氏のホームページ（http://www.nig.ac.jp/color/）をご覧いただき、図表作成の参考にして下さい。

キャリアエクスプローラーマーク（CE マーク）の表示

本大会から、発表者である学生・ポスドクは、本人が希望する場合、求職中であることを示すキャリアエクスプローラーマークを口頭発表やポスター発表の際に表示することができます。口頭発表のタイトルページやポスターのタイトル付近に表示ください。CE マークの使用許可は取得済みですので、（社）応用物理学会 HP（http://www.jsap.or.jp/activities/annualmeetings/CEmark.html）からダウンロードしてお使いください。

講演要旨

講演要旨は、大会公式ホームページで登録してください。2008 年 12 月 15 日（月）から受付ける予定です。

締め切りは **2009 年 1 月 9 日（金）17:00** の予定です。長さはタイトルと著者名を含めて日本語の場合 800 字以内、英語の場合は 200 語以内です。詳細は大会公式ホームページでご確認ください。

シンポジウム

大会シンポジウムの企画案公募は 2008 年 7 月 11 日（金）で締め切りました。

現在、企画提案者と大会企画委員会で準備を進めています。シンポジウムの内容が決まりましたら、大会公式ホームページを通じてご案内します。

企画集会と自由集会

第 56 回大会では、前回大会と同じ要領で、企画集会と自由集会を募集します。企画集会と自由集会は一括して募集され、受付後に企画者の希望を考慮し、大会企画委員会によって企画集会と自由集会に割り振られます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

企画集会

・企画集会には、大会参加費を支払った人に限って参加できます。

・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められます**が、原則として日程の調整は行いません。
・各集会は最大 2 時間とし、3 月 17 日（火）、18 日（水）、19 日（木）、21 日（土）を充てる予定です。

自由集会

・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められます**が、原則として日程の調整は行いません。
・各集会は最大 2 時間とします。集会の数の都合で、自由集会は各種委員会・全国委員会・公開講演会と並行した時間帯などに設定される場合もあります。

企画集会、自由集会ともに、企画者は C 会員を含む日本生態学会会員に限ります。

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、**2008 年 10 月 24 日（金）17:00** までに大会公式ホームページからお申し込みください。

いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに特定の個人を傷つける内容を含むと判断されるものについては、その限りではありません。

提案された企画集会・自由集会の数が会場の収容可能数を上まわる場合には、同一会員が重複して複数の集会の企画者となっている提案からご遠慮いただきます。次に、大会シンポジウム企画者による提案にご遠慮いただきます。それでも数が多い場合には、自由集会は抽選によって採否を決定します。これらの制限は、限られた場所と時間に対して、たくさんの企画者の方の提案を順序立てて受け入れるための措置ですので、ご了承ください。

開催の可否については、11 月 21 日（金）までにメールでご連絡します。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複講演制限の対象となりません。

懇親会

2009 年 3 月 20 日（金）にホテルメトロポリタン盛岡 NEW WING で懇親会をおこないます。懇親会会場は、JR 盛岡駅から歩いて 3 分、当日の学会会場（マリオス・アイーナ）から歩いて 6 分のところにあります。盛岡市内で最大の会場です。たくさんの方々の参加をお待ちしております。

託児所

大会主会場の岩手県立大学内と、総会・公開講演会会場の盛岡市民文化ホール（マリオス）内に託児室を設置する予定です。開設時間、申し込み方法等は大会公式ホームページでお知らせします。

エコフォトアワード 2009

第 56 回大会実行委員会では、生態学者の自然観を表現し、広く一般の人々に自然や生態学への興味を喚起するような写真の展示会を企画しました。写真展のタイトルは、“生態学者が選ぶ『未来に残したい森羅万象』”です。皆様、ご自慢の一枚のご応募をお待ちしています！

応募される写真は、必ずしもご自身の研究テーマと関連するものでなくても構いません。また、応募作品は 1 人 1 枚、未発表作品に限らせていただきます。

応募手順：

1）応募作品の低解像度デジタル画像（500KB 以下の JPEG ファイル）を準備し、応募者氏名、所属住所、写真のタイトル、100 字以内の説明コメント、を書いた E メールにファイル添付して、下記応募先に送付して下さい。メールのタイトルは「epa2009」に応募者氏名を付けたもの（例：epa2009 盛岡花子」）として下さい。

2）応募作品は盛岡大会実行委員会の事前審査により、展示作品 40 点（予定）を選出します。選出の通知を受けた方は、応募作品の高解像度画像（1600 × 1200 ピクセル以上）を収録したメディア（CD を推奨）を実行委員会に送付して下さい。

＊ 1）、2）いずれの場合も、写真展に関する審査と展示以外には使用しませんが、展示作品は、作者合意のもとで Ecological Research の表紙写真等に使用させていただくことがあります。また、送付されたファイルは使用後責任を持って消去し、メディアは大会受付あるいは郵送にて返却します。

審査と表彰：事前審査通過の 40 作品は大会実行委員会で印刷し、2009 年 3 月 20 日の総会・公開講演会会場にパネル展示します。展示会場にて、参加者および一般参集者の投票により本審査を行い、優秀作品を大会懇親会にて発表、表彰します。

応募先：epa2009@me.com

応募メール受付：9 月 29 日（月）～ 11 月 14 日（金）

エコカップ 2009

大会サテライト企画として、3 月 22 日、岩手県営体育館（盛岡駅からバス 12 分）で親善フットサル大会「エコカップ 2009」が行われます。主催はエコカップ 2009 実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

宿泊・交通案内

主会場となる岩手県立大学の付近には宿泊施設はありません。主な宿泊地となる盛岡市内のホテルは盛岡駅周辺と市内中心部に多数ありますが、部屋数は限られています。そこで、盛岡市内のホテルや航空・宿泊セットプランなどの予約を JTB 東北に依頼しています。詳細は大会公式ホームページにリンクする JTB Multi Entry 内の「旅行申込募集要項」、「ツアー参加募集要項」を参照してください。

岩手県立大学、盛岡駅前とも駐車場が利用できます（駅前は有料）。大会期間中に降雪や路面凍結も予想されますので、自家用車等での参加の場合、冬用タイヤの準備をお願いします。

連絡先

〒 020-8550　盛岡市上田 3-18-34
岩手大学　人文社会科学部　環境生物学研究室　気付
日本生態学会第 56 回大会（ESJ56）実行委員会
TEL（FAX 兼）：019-621-6829
担当：由井正敏（大会会長）、牧 陽之助（大会実行委員長）
電子メール　taikai@mail.esj.ne.jp
大会公式ホームページ　http://www.esj.ne.jp/meeting/56/

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページにある問い合わせページからお願いします。ただし、宿舎関係は「宿泊案内」の担当業者に直接ご連絡ください。

記　事

Ⅰ．日本生態学会大会総会（2008 年 3 月 16 日、参加者約 150 名）および全国委員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 庶務報告（2007 年 4 月～ 2008 年 2 月）

1. 文部科学省より第 11 回公開講演会（福岡）へ平成 19 年度科研費（研究成果公開発表）の内定通知があった（1,200,000 円）（4 月 1 日）
2. 日本学術振興会より平成 19 年度科研費（出版助成金）の決定通知があった（10,200,000 円）（4 月 2 日）
3. 会員名簿作成のためのアンケートを正会員へ送付した（6 月 21 日）
4. 生態系管理専門委員全員の 1 年間の任期延長が全国委員会にて承認された（7 月 25 日）
5. 学会賞選考委員会新規委員として齊藤・河田・杉本の 3 氏が全国委員会の推薦投票により選ばれた。また細則変更に際して、昨年度委員の 1 年任期延長が全国委員会にて承認された（8 月 24 日）
6. 次期 ER 編集委員会幹事候補 3 名と委員候補 54 名が全国委員会にて承認された（9 月 7 日）
7. 次期生態誌編集委員会幹事候補 3 名と委員候補 19 名が全国委員会にて承認された（9 月 8 日）
8. 次々期会長候補 5 名が全国委員により推薦された（9 月 7 日）
9. 次期全国委員選挙における若手・女性候補者 6 名が全国委員により推薦された（9 月 8 日）
10. Ecological Research 出版に係る競争入札の公示を HP にて行い、シュプリンガー社と 2009 年まで出版契約することになった（10 月 31 日）
11. 次々期会長および次期全国委員選挙の開票を事務局にて行った（11 月 7 日）
12. 会費の銀行引落し申請会員へ引落し通知はがきを送付した（11 月 13 日）
13. 学会賞選考委員会に推薦された宮地賞および大島賞受賞候補者が全国委員会にて承認された（11 月 18 日）
14. 2008 年会費請求書を個人会員に送付した（12 月 7 日）
15. 次期常任委員 6 名および次期幹事長粕谷英一氏について全国委員会にて承認された（12 月 21 日）
16. 次期生態誌編集長堀良通氏の保全生態学研究編集委員の辞任、森野浩氏の次期生態誌編集幹事および、大会企画委員の 3 ヶ月任期延長が全国委員会にて承認された（12 月 21 日）
17. 会計監事候補山内淳氏が全国委員会にて承認された（12 月 28 日）
18. 日本学術振興会に平成 19 年度科研費・学術定期刊行物状況報告書を送付した（1 月 10 日）
19. 生態学会が滋賀県主催の生態学琵琶湖賞の実施主体になることについて全国委員会にて承認された（1 月 31 日）
20. 第 6 回生態学会功労賞候補者の藤井宏一氏と西平守孝氏について全国委員会にて承認された（2 月 12 日）
21. 生態学会誌編集委員候補沖津氏と池田氏の就任について全国委員会にて承認された（2 月 28 日）

＊各種集会へ共催の名義使用 14 件、論文・図などの転載 10 件、登録申請 1 件、その他事務局ミーティングなど 8 件

b. 2007 年度学会誌発行状況、会員数、会費納入率

(1)学会誌発行部数および配本内訳（2007 年 12 月末現在）

日本生態学会誌 57 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	3800	3800	3700
配本部数	3800	3708	3675
残部数	0	92	25

Ecological Research Vol.22

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	3700	3650	3650	3600	3600	3550
配本部数	3651	3650	3589	3554	3546	3534
残部数	49	0	61	46	54	16

保全生態学研究 12 巻

	1 号	2 号
発行部数	1300	1250
配本部数	1259	1240
残部数	41	10

配本内訳

	日本生態学会誌		Ecological Research		保全生態学研究	
	57 巻 3 号		Vol.22 No.6		12 巻 2 号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	2607	85	2573	85	948	23
学生会員	748	106	742	106	188	17
団体	133	0	133	0	30	0
国外個人会員	35	6	35	6	3	0
国外団体会員	0	0	0	0	0	0
賛助	1	0	1	0	0	0
小計	3524	197	3484	197	1169	40
名誉会員	3	0	3	0	0	0
寄贈交換	56	0	47	0	56	0
購読	92	0	0	0	6	0
小計	151	0	50	0	62	0
合計	3675	197	3534	197	1231	40

（2）会員数（各年度 12 月末現在）

	2006 年							2007 年						
	一般 A	B	C	学生 A	B	C	合計	一般 A	B	C	学生 A	B	C	合計
北海道	215	67	21	87	18	2	410	201	69	22	79	20	4	395
東北	134	42	6	43	4	1	230	127	41	7	43	6	2	226
関東	681	276	80	198	79	10	1324	668	295	85	200	79	12	1339
中部	259	129	27	89	20	10	534	269	131	32	84	19	7	542
近畿	311	129	24	161	27	12	664	308	144	24	177	29	7	689
中四国	165	56	8	74	9	3	303	164	67	9	83	6	5	323
九州	198	51	13	55	12	2	331	194	56	12	52	14	2	330
小計	1963	750	179	707	169	40	3808	1931	803	191	718	173	39	3855
団体				A 114	B 22	C 5	141				A 107	B 24	C 5	135
国外団体							0							0
国外一般							31							41
同上国内扱い							0							0
賛助							1							1
名誉							4							3
小計							177							180
合計							3985							4035

（3）会費納入率（各年度 12 月末現在）

	2006 年		2007 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	92.5	78.5	92.8	71.8
東北	89.0	72.9	93.1	66.7
関東	91.0	71.8	90.7	72.8
中部	92.6	72.3	93.1	61.8
近畿	92.7	74.0	92.2	79.8
中四国	93.0	74.4	94.1	70.2
九州	91.9	73.9	91.2	72.0
平均率	91.8	74.0	92.1	72.4

c. 会計報告（2007 年 3 月～ 2008 年 2 月）

1. 東京化学同人より出版印税として 125,244 円の振込みがあった（3 月 23 日）
2. ER22-1,2 印刷費としてシュプリンガー社に 5,496,750 円を支払った（3 月 28 日）
3. 第 11 回宮地賞受賞者へ賞金 30 万円ずつを送金した（3 月 29 日）
4. ER 売上還元金としてシュプリンガー社より 749,468 円の振込があった（4 月 25 日）
5. 文部科学省より H19 年度科研費補助金（公開講演会）1,200,000 円の振込があった（5 月 31 日）
6. 松山大会実行委員会より大会還元金として 1,341,598 円が振り込まれた（7 月 10 日）
7. 松山大会実行委員会より公開講演会費用余剰金として 199,820 円が送金された（7 月 10 日）
8. 文科省へ平成 18 年度科研費（研究成果公開）の余剰金 199,352 円を返還した（7 月 24 日）
9. 土倉事務所へ生態誌 57 巻 1 号およびニュースレター No.12 印刷代として 2,742,075 円を支払った（8 月 7 日）
10. 東京化学同人より「生態学入門」出版印税として 265,608 円が振り込まれた（8 月 24 日）
11. シュプリンガージャパンへ Ecological ResearchVol.22 No.3-6 印刷費として 10,993,500 円を支払った（10 月 24 日）
12. 土倉事務所へ保全誌 12 巻 1 号およびニュースレター No.13 印刷代として 1,315,177 円を支払った（11 月 13 日）
13. 土倉事務所へ選挙に係る印刷物書費用として 341,943 円を支払った（11 月 20 日）
14. 土倉事務所へ会員名簿印刷費として 1,851,150 円を支払った（11 月 20 日）
15. 土倉事務所へ生態誌 57 巻 2 号印刷代として 2,234,400 円を支払った（12 月 14 日）
16. 土倉事務所へ生態誌 57 巻 3 号、ニュースレター No.14 および保全誌印刷代として 3,549,473 円を支払った（12 月 18 日）
17. 2007 年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。（1 月 30 日）
18. （株）アライブネットへレンタルサーバ年間利用料として 418,000 円を支払った。（1 月 9 日）
19. INTECOL2007 年会費として 427,576 円を支払った。（1 月 28 日）

2. 大会企画委員会

1. 委員の入れ替え
   新委員会の編成については日本生態学会役員一覧参照。
2. シンポジウム、企画集会のスポンサーからの要請があれば、当該の集会に限りスポンサーを共催者と位置づけることを認める。
3. 盛岡大会は、集会のカテゴリー（シンポジウム、フォーラム、企画集会、自由集会）など福岡大会に準じた形式で開催する。
4. 大会規定を策定する。原案を盛岡大会までに準備する。
5. 研究発表時にキャリアエクスプローラーマーク（求職中示す印）の使用を奨励する。

（文責：齊藤隆）

3. Ecological Research 刊行協議会

日時：2008 年 3 月 14 日（金）14:00 ～ 16:00

議題：

1. 事務局報告（投稿論文数と内訳、審査状況、受理・却下率など）

年間投稿数の推移

年度	投稿数	通常論文
1998	66	66
1999	106	106
2000	130	130
2001	195	168
2002	166	166
2003	185	169
2004	223	209
2005	341	330
2006	416	362
2007	423	448

新規投稿の Decision までの期間

	Totlal Decision	%	Average time
Accept as is	1	0.5	50
Revision	82	39.5	69
Reject	125	60	46

2. 出版社報告（シュプリンガーより）
IF（2006）＝ 1.012
3. Ecological Research Award 2007 受賞論文について
受賞論文（全 5 編）
(1) pp. 185-196 (No. 2)
Yamanaka, T., K. Tanaka, A. Otuka and O. N. Bjornstad
Detecting spatial interactions in the ragweed (*Ambrosia artemissifolia* L.) and the ragweed beetle (*Ophraella communa* LeSage) populations.
(2) pp. 475-484 (No. 3)
Yusuke Onoda, Tadaki Hirose, Kouki Hikosaka
Effect of elevated CO_2 levels on leaf starch, nitrogen and photosynthesis of plants growing at three natural CO_2 springs in Japan
(3) pp. 792-801 (No. 5)
Yasuhiro Kubota, Akiyoshi Narikawa, Kenichiro Shimatani
Litter dynamics and its effects on the survival of *Castanopsis sieboldii* seedlings in a subtropical forest in southern Japan
(4) pp. 825-830 (No. 5)
Kil Won Kim, Suegene Noh, Jae Chun Choe
Lack of field-based recruitment to carbohydrate food in the Korean yellowjacket, *Vespula koreensis*
(5) pp. 911-919 (No. 6)
Ryuji Yonekura, Kouichi Kawamura, Kimiko Uchii
A peculiar relationship between genetic diversity and adaptability in invasive exotic species: bluegill sunfish as a model species.

4. Journal Web page による宣伝活動について
5. ER 表紙の写真の募集について（HP 参照）

（文責：河田雅圭）

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時：2008 年 3 月 14 日（金曜日）14:00 ～ 15:20
場所：福岡国際会議場　Room G 4 階
出席者：堀良通（編集委員長）、山村靖夫（編集幹事）、北出理（編集幹事）、鎌田直人、古賀庸憲、小林剛、鈴木まほろ、津田みどり、野田隆史、池田浩明、遊磨美由紀（編集事務）、天野貴子（土倉事務所）

議題
1）投稿規定の改定について
編集方針　日本生態学会誌は、日本生態学会が定期的に刊行する和文の生態学の研究・情報誌であり、生態学の発展と普及を図ることを目的とする。
記事の区分　日本生態学会誌は以下の記事を掲載する。
（1）原著：内容が編集方針に添うものであると編集委員会が判断した原著論文。
（2）総説：生態学の各分野の現状を紹介し、これまでの総括と今後の展望を示した記事。
（3）特集：企画者がテーマを決め執筆を依頼した複数の論文からなる記事。
（4）学術情報：編集委員による依頼執筆、あるいは投稿による研究や教育に関する情報。
（5）意見：投稿による学会の活動、研究、教育などに関する意見。
2）2007 年投稿状況報告
3）3 月号（58 巻 1 号）の編集状況報告

2007 年投稿状況
投稿状況（2007 年 1 月 1 ～ 2007 年 12 月 31 日）
前編集部では 8 月末日までの取り扱い

	原著	総説	記事	特集	意見	学術情報
投稿総数	3	7	19	11（2）	0	0
受理	0	6	19	11	0	0
却下	3	1	0	0	0	0
審査中	0	0	0	0	0	0

新編集部取り扱い（2007 年 9 月 1 日より 12 月末日まで）

	原著	総説	記事	特集	意見	学術情報
投稿総数	1	1	0	0	0	0
受理	0	1	0	0	0	0
却下	1	0	0	0	0	0
審査中	0	0	0	0	0	0

（文責：堀良通）

5. 保全生態学研究編集委員会（刊行協議会）

日時　2008 年 3 月 14 日（月）12:15 ～ 13:45
場所　福岡国際会議場　Room G（4F）
出席者：湯本貴和（委員長）、椿宜高（幹事）、西廣淳（幹事）、小池裕子、小池文人、舘野正樹、中越信和、長谷川眞理子、早矢仕有子、藤岡正博、松田裕之、安田雅俊、鷲谷いづみ、遊磨美由紀（編集事務）、天野貴子（土倉事務所）

報告事項
1）投稿・校閲状況
2007 年 12 月末日現在の投稿状況

	原著	総説	実践報告	保全情報	意見	合計
投稿総数	31	4	6	4	1	46
受理	17	3	3	4	0	27
却下	5	1	1	0	1	8
審査中	9	0	2	0	0	11

2007 年：投稿総数 46 編：受理 27 編、却下・取り下げ 8 編、校閲中、改訂中 11 編
（2006 年：投稿総数 19 編　受理 14 編、却下・取り下げ 4 編、校閲中 1 編）
投稿数が昨年に比べ大幅に増えている。
2）13-1 号の進捗状況
現在、印刷所に 13 編を入校中、初校は 4 月半ばの予定。

審議事項

1）次期編集委員長について

編集委員長に交渉を一任することになった。

任期：2009 年 4 月～ 2012 年 3 月

選定基準：（前回のもの）

1. 保全生態学者としてすぐれた研究業績をもつ方
2. 研究者だけでなく、保全活動を行う市民とも信頼関係を築いている方
3. 編集委員長業務を行うことが時間的に可能な方
4. 編集委員として保全生態学研究の編集・運営をご存知の方

2）編集委員の追加について

植物関係の投稿が多く編集委員の追加について編集委員長より推薦があり、承認された。それぞれの方への交渉は編集委員長に一任された。

（文責：湯本貴和）

6. 自然保護専門委員会

開催日時：2008 年 3 月 14 日（金） 12:15 － 15:10

開催場所：福岡国際会議場 RoomF

出席者：立川賢一（委員長）、佐藤謙（副委員長）、清水善和（幹事）、竹原明秀、鈴木孝男、井田秀行、和田恵次、加藤真、安渓遊地、逸見泰久、鈴木信彦、増沢武弘、竹門康弘、井鷺裕司、横畑泰志、村上興正、吉田正人（以上、現委員）
向井宏、角野康郎、大田直友、竹中千里（以上、継続以外の新委員）

審議事項

Ⅰ部 現委員による審議

1. 次期委員の確認

各地区会から推薦された地区選出委員、および本委員会で推薦された専門別委員を確認した（同日、全国委員会で承認された）。＊日本生態学会役員一覧参照。

なお、委員の確認に先だち、専門別委員の「酸性雨」を廃止し、「大気汚染」を新に設置することが了承された。

2. 次期委員会役員の選出

役員選挙規程に従い、次期委員長に立川賢一、副委員長に加藤真、幹事に吉田正人が選出された（同日、全国委員会で承認された）。

II 部 現委員と次期委員との合同審議等

1. 委員会活動費の会計について

2007 年度の委員会活動費は、収入予算 60 万円で、支出合計が 547,060 円であったことが報告され、承認された。2008 年度活動費予算案は収入予算 60 万円で、要望書アフターケア委員会活動費、外来種問題検討作業部会活動費、役員事務費等に割り振ることが承認された。

2. 天然林伐採問題検討作業部会について

佐藤部会長より、5 名の部会委員を選定したが、実質的な活動はできなかったとの報告があり、今後、新たに部会委員を増員するなど体制を整えて要望書案を作成し、委員会に諮っていくことが了承された。

3. 外来種問題検討作業部会について

村上部会長より、「外来生物ハンドブック」の編集方針、章立て等が説明された。また、部会委員を数名補充する予定が報告され、了承された。

4. その他

今年 10 月に予定されている観光庁の発足を踏まえて、専門別委員に「エコツーリズム」を加えることを次回に向けて検討することになった。

報告事項

1. 2007 年度自然保護専門委員会活動報告

2007 年度の委員会活動報告がなされた。主な項目は下記の通り。

2007 年

○ 4 月 23 日：「生物多様性国家戦略見直しの論点整理」への意見書を立川委員長名で環境省自然環境局自然活況計画課に提出。

○ 6 月 26 日：環境省生物多様性国家戦略小委員会におけるヒアリング（東京国際フォーラム）で、意見書「生物多様性国家戦略見直しの論点整理」を基に、立川委員長が菊澤会長に代わり意見を述べた。

○ 6 月 30 日：第 13 期第 5 回常任委員会に立川委員長が出席し、自然保護専門委員会の活動報告を行った。

○ 10 月 12 日：「第三次生物多様性国家戦略策定案」に対する意見書最終案を学会事務局に提出した。

○ 10 月 15 日：『「第三次生物多様性国家戦略」への意見書」』を菊澤会長名で環境省自然環境局に提出した。

○ 12 月 2 日：東京で、福岡大会における委員会運営に関して三役会議を行った。

○ 12 月 8 日：第 13 期第 6 回常任委員会に立川委員長が出席し、自然保護専門委員会の活動報告を行った。

○ 12 月 16 日：東京で、外来種ハンドブック編集委員会が開催され、15 名が参加し章立てなどの骨子をまとめた。

2008 年

○ 2 月 6 日：第 14 期第 1 回常任委員会に立川委員長が出席し、自然保護専門委員会の活動報告を行った。

○ 2 月 7 日：東京で、福岡大会における委員会運営等に関して電話連絡を含む三役会議を行った。

○ 2 月 15 日：民主党・生物多様性基本法案（仮称）のパブリックコメント募集に対して、本委員会が中心となってまとめた意見書を立川委員長名で提出した。

2. アフターケア委員会報告

次のアフターケア委員会より各要望書に関する活動と現状の報告がなされた。

1）「緑資源幹線林道、平取・えりも線「様似・えりも区間」の工事中止を求める要望書（第 52 回大会決議）」（佐藤委員）

2）「細見谷渓畔林（西中国山地国定公園）を縦貫する大規模林道事業の中止および同渓畔林の保全措置を求める要望書（第 50 回大会決議）」（金井塚アフターケア委員の資料を安渓委員が説明）

3）「上関原子力発電所に係る環境影響評価についての

要望書（第 48 回大会決議）」（安渓委員）
4）「尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギの排除を求める要望書（第 50 回大会決議）」（横畑委員）
5）「人工洞穴に生息する野生動物、特にコウモリ類に対する保全対策実施の要望書」（上條委員の資料を清水幹事が説明）

3. 外来種問題検討作業部会報告（村上部会長）（別紙報告）
4. 生態系管理委員会報告（竹門委員）
付記：本大会中に上記アフターケア委員会の 1）、2）、3）に関するポスター発表が行われた。
5. その他
次のような意見・質問が出され議論された。
・自然保護に関する他の学会などの活動情況を委員が提供しあって、委員会として情報を共有したらどうか。
・今回は新たな要望書（案）の提出がなかったが、委員会活動の大きな柱として今後も重視していくべきである。
・地元で風力発電の問題が持ち上がっているが、要望書（案）につなげるにはどうしたらよいか。

（文責：立川賢一）

7. 外来種検討作業部会

日時：2008 年 3 月 14 日 10-12 時
場所：福岡国際会議場ルーム G
出席者：村上・横畑・池田・石田・岩崎・桐谷・五箇・立川・富山・中井・森本・常田（オブザーバー）
議題
1. 外来種検討作業部会員の選出　従来の方々にモデルを扱う人として小池正人、高山・亜高山に増沢武弘、植物と両生爬虫類に各 1 人追加する（人選検討中）
2. 外来生物ハンドブックについて
12 月の編集会議を踏まえて外来生物ハンドブックの項目に関してたたき台が提出され、これを論議した。主な修正点は下記の通りである。
・第 1 章 1 に外来生物はなぜ問題となるのかを生物多様性の保全や進化をベースとして位置づけることとする。
・第 1 章 5 の前の版の内容を少し詰めて分担執筆の形をとる。
・第 2 章 3 の国による取り組みに環境省だけでなく、農水省や国土交通省の取り組みに適任と思われる人を選んで記述して貰う。
・第 2 章 6 日本における外来種の侵入手段と経路ならびにその対策に下記内容を加える。
・人の移動に伴う非意図的な持ち込み
・「花ゲリラ」など人による意図的導入
・船舶付着による持ち込み
・釣りえさによる導入
外来種事例集に関しては各区分類群の担当編集委員から提案がなされ了承された。
これらに関してはあまりにも詳細となるために議事録には記述しないこととする。
3. 外来哺乳類に関する国際学会が今年 10 月 28 日から 30 日に池田さんを中心に日本、イギリス、ニュージーランドの 3 カ国の協働で環境省共催の形で沖縄で開催されることとなった。これを日本生態学会の後援を取り付けるべく申請作業中であり、本作業部会としてこれを支援することとした。
4. その他
魚釣島の植生破壊状況と土壌浸食状況の人工衛星画像による解析結果について横畑委員から話題提供があった。

（文責：村上興正）

8. 将来計画専門委員会

議事
（1）総合地球環境科学研究所と京都大学生態学研究センターの現状と将来構想
・国立大学フィールド科学センターネットワークのハブの機能を地球研が担うべく平成 21 年度概算要求する。地域研究コンソーシアム（文科系）のハブ機能も包含する。
・センターを京大のフィールド教育研究センターと統合して全国共同利用の生物多様性研究所（仮称）に改組することが検討されている。
（2）学術会議の動向について
諮問や対外的な報告等を通じて政策提言機能が大いに高まりつつある。生態学関連学協会の連合組織の設立を検討すべき。→全国委員会に提案する。
大学学部前期教育における生態学関連プログラムについて、北大、京大、東大、放送大学の例が紹介された。生態学に関心をもつ学生（特に文系）の減少傾向が顕著であり、教養向け教科書や普及書が必要（共立の新シリーズの 1 冊として発行の可能性もある）。
（3）若手・女性研究者をめぐる問題について（可知委員長）
男女共同参画学協会連絡会の動向について
学術分野における男女共同参画の取組みで中心的な役割を果たしている。
・連絡会シンポジウム（名古屋大学）
参加報告は生態学会ニュースレター No 14（2007 年 11 月）に掲載されている。
・大規模アンケートについて
2007 年秋に第 2 回の大規模アンケートを実施した。生態学会員の 12.1％（483 名）が回答した。3 月 16 日のフォーラム「フォーラム男女共同参画と若手支援へ」で速報を紹介する。
（4）法人化後の将来計画専門委員会の体制について（可知委員長）
常任委員会が理事会として機能するようになると、学会の将来計画は理事会の仕事になる。将来計画専門委員会はより長期的視野で、生態学の学術的発展や社会との関係、若手支援や男女共同参画など、生態学関連分野の将来計画を広く「調査・研究」し提言する委員会として再編する方向で検討をすすめる。
（5）若手会員のキャリアパスについて
博士取得者の就職先についての調査、マッチングフォーラムの開催、自然システムに関する専門家として

の生態学研究者の必要性を社会にアピールするなど、具体策について検討を開始する。

(6) その他

科学技術振興機構（JST）の動向について（鈴木（準））

・地球温暖化に対する生態系・生物多様性の反応に関する研究は、学術面にかぎらず社会的・政治的にもおおきな意義を有するようになってきている。さまざまな機会を捉えて、より一層のアピールが必要である。

・科学技術・ODA 連携新事業「地球規模課題国際協力事業（仮称）」が開始される。環境・エネルギー、防災、感染症等の地球規模課題について、JST と JICA が連携して日本と開発途上国（アジア・アフリカ）との国際共同研究を推進する。公募に手が挙がらないと、防災・感染症等への予算の振り向けられる。積極的に応募を。

（文責：可知直毅）

9. 生態学教育専門委員会

(1) 日本生物教育会･香川大会の参加（2007 年 8 月 6･7 日）

・嶋田委員長、広瀬委員（大阪府立茨木高校教諭）が参加した。

・「生態学入門」を宣伝するため、ブースでポスターやチラシを展示し、大会参加者と意見交流した。

(2) 国際生物学オリンピック（IBO2009、2009 年 7 月つくば市で開催）への委員派遣

・生物科学学会連合 23 学会の申し合わせ（学会としてではなく個人のボランティアで対応する）に従って、IBO2009 の出題委員（生態・進化分野で予備問題も含めて約 20 問を作成）、国内選抜試験（JBO、2008 年 12 月頃実施予定、3 ～ 4 問ほど作成）の作問委員、それぞれを人選し、常任委員会（2008 年 2 月 6 日）で報告した。

(3) 高校大学連携による「生態学実習書」の編集

・高校と大学の連携による「生態学実習書」を編集し、本学会 HP で公開する。

・2007 年 12 月 21 ～ 22 日に東大・農学部で委員会を開催し、「生態学実習書」の実習テーマの事例を紹介した。

・高校生物の授業用､課外活動として生物部の指導用、大学教養課程（1・2 年）の授業用など、ジャンル別の構成にする。利用者が実習テーマをダウンロードしたり、一部をコピー＆ペーストするのも許可する。印刷体の出版は検討中。

・学会内外の高校生物教師や大学教員に広く実習テーマを募集し、テーマ作成のための投稿規程やフォーマットを案内する。授業で利用しやすいように、ワークシート作成も指示する。

・メールで pdf ファイルの投稿を受付け、査読と改訂を経て､完成したものから本学会の HP で公開する。

・福岡大会の企画フォーラム（16 日午後）で、生態学教育専門委員会を中心に、趣旨説明やテーマの事例などを紹介する。

（文責：嶋田正和）

10. 生態系管理専門委員会

・委員長を竹門康弘氏、副委員長を松田裕之氏とした。

・自然再生講習会を 2008 年 10 月 4 日（場所:東京大学）に開催することとした。

・自然再生推進法に関するパブコメが出た場合、意見提出を検討することとした。

（文責：矢原徹一）

11. 大規模長期生態学専門委員会

出席者：日浦、中静、甲山、占部、三枝、大手、鈴木、中村、オブザーバー（正木、小川）

1）ER データペーパー新設について

・データ公開のインセンティブを高める、データベースのクオリティコントロールという両方の利点がある。

・学会としてサーバを持つことが妥当ではないか（現状はレンタル）。そのために法人化と絡めて考え、専任のサーバー管理者を学会が雇うことも視野に入れる。

・審査プロセスに馴れていないので、これに関する情報も集める。

・データーペーパーワーキンググループを設けて検討する。

2）JaLTER 活動報告

・2007 年 11 月 JaLTER-JapanFlux ジョイント研究集会開催（筑波）

・データベースがほぼ完成、これに伴い EML 講習会開催。現在サーバーを国立環境研に設置、JaLTER 内で試運転中。

・5 サイト（1 コアサイト、4 準サイト）が新規登録された（計 15 コアサイト、31 準サイト）。

3）GLP 活動報告

・コペンハーゲンに事務局が設置された（札幌にも拠点オフィス）。

・承認プロジェクト募集中（日本オフィスが扱う）

・4 月から柴田英昭氏が科学委員に選出

4）JapanFlux 活動報告

・AsiaFlux のもと 2006 年に組織された（現在 23 サイト）。

・日本の研究者によるフラックス研究の成果を収集、統合し発信する

5）その他

メンバー入れ替え　中静、占部氏に代わり柴田英昭、正木隆の各氏

（文責：日浦勉）

12. 国際対応委員会

EAFES-3（北京にて開催）2007 年 5 月 23 日～ 5 月 25 日

1. コングレス

2007 年 5 月 23 日

開会式、プレナリー（各国 2 人× 3 ＝ 6 人）、

24 日、25 日、合計 6 シンポジウム

うち日本は 4 つにコーディネータ、全部のシンポジウ

ムで発表あり
発表数（日本から）
プレナリー：6（2）
シンポジウム：80（22）
2. ビジネスミーティング
1）次回の EAFES4 のコングレスは 2010 年に韓国にて開催する。
2）次回のビジネスミーティングは 2008 年に韓国で開催予定。

（文責：中静透）

13. 野外安全管理委員会

野外安全管理委員会は、大会期間中に、委員会が主催したフォーラム「野外調査における危険と安全」の準備もかねて委員会を行った。フォーラム準備とともに、野外調査の安全マニュアル案への会員などから寄せられる声の反映について議論した。また、同マニュアル案の内容をプレゼンテーション用ソフトウェアのファイルとしたものを作成することとし、その作業についても議論した。

（文責：粕谷英一）

14. 学術会議

■第 20 期･第 5 回　生態科学分科会（基礎生物学委員会･応用生物学委員会合同）
1. 地球温暖化と生態学研究の動向に関する調査報告
・フェノロジカルな長期モニタリングデータの解析により温暖化の兆候が観測。
・モデルシミュレーションによる未来予測研究の必要性が議論。
2. 高等学校における理科教育と指導要領における生態･進化分野の扱いに関して報告
3. 野外長期生態学研究の重要性と施設・職員の維持
・沿岸域や渓流における長期観測データが紹介され、臨海実験所などの大学等付属研究施設の存続と充実に対する要望提出。
・環境省モニタリングサイト 1000 への参画が提案されたが、共同利用施設は概算要求できないなどの問題点も指摘。
4. 前回以降の動向
5. 京都大学から前期教育における生態学関連プログラムの報告

■第 20 期･第 6 回　生態科学分科会（基礎生物学委員会･応用生物学委員会合同）
1. 生態科学教育の現状把握および問題点の検討
・東京大学から自然史分野の授業リストが提示。
2. 高等学校理科の指導要領改訂における生態・進化分野の扱いについての報告
3. 地球温暖化と生物多様性保全に関する報告
・フェノロジカルな長期モニタリングデータの解析により温暖化の兆候が観測。
・モデルシミュレーションによる未来予測研究について樋口委員がまとめる。
4.「地球温暖化研究における生態科学の貢献」についての議論を紹介
5. 前回以降の動向

（文責：松本忠夫）

B. 承認事項

1. 2007 年度決算

一般会計

収入の部			支出の部		
	07 予算	07 決算		07 予算	07 決算
会費			会誌発行費		
一般会員	30,500,000	31,495,900	ER	20,000,000	19,620,615
学生会員	6,100,000	6,069,400	生態誌	4,800,000	6,737,205
団体会員	2,800,000	3,259,000	保全誌	1,400,000	1,336,583
賛助会員	20,000	20,000	ニュースレター	1,200,000	1,197,787
外国会員	270,000	275,600	編集費	200,000	273,958
和文誌購読	780,000	752,200	小計	27,600,000	29,166,148
小計	40,470,000	41,872,100	会議費	150,000	151,217
			旅費・交通費	2,000,000	2,032,051
ER 売上還元金	400,000	749,468	人件費	15,700,000	15,732,414
Back No. 売り上げ	100,000	42,500	地区会へ還元金	1,500,000	1,552,716
科研費・刊行助成金	10,000,000	11,400,000	大会支出	13,000,000	14,808,482
出版印税	400,000	390,852	公開講演会	1,100,000	910,886
利子収入	2,000	47,760	INTECOL 会費	230,000	427,576
その他収入			事務費		
広告代	180,000	180,000	通信費	1,100,000	889,658
著作権使用料	180,000	200,906	消耗品費	150,000	166,995
ER 超過ページ代	300,000	1,099,500	雑費	400,000	434,562
大会収入	15,000,000	16,150,080	銀行手数料	130,000	133,695
前年度繰越金	29,765,537	29,765,537	レンタル料	420,000	418,000
			事務所賃貸料・電気代	1,680,000	1,680,000
			会計監査（税理士）	378,000	378,000
			小計	4,258,000	4,100,910
			各種委員会費	1,160,000	932,650
			名簿作成費	3,800,000	2,848,874
			選挙費	1,000,000	388,839
			EAFES 費用	300,000	100,000
			次年度繰越金	24,999,537	28,745,940
合計	96,797,537	101,898,703	合計	96,797,537	101,898,703
単年度収入	67,032,000	72,133,166	単年度支出	71,798,000	73,152,763

特別会計 I（宮地基金）

収入の部			支出の部		
	07 予算	07 決算		07 予算	07 決算
前年度繰越金	4,694,484	4,694,484	宮地賞賞金	300,000	600,000
預金利息	0	5,061	次年度繰越金	4,694,484	4,099,545
合計	4,694,484	4,699,545	合計	4,994,484	4,699,545

大島基金

収入の部			支出の部		
	07 予算	07 決算		07 予算	07 決算
前年度繰越金	10,000,396	10,000,396	大島賞賞金	200,000	0
預金利息	0	11,533	次年度繰越金	9,800,396	10,011,929
合計	10,000,396	10,011,929	合計	10,000,396	10,011,929

2. 第 57 回大会（2010 年）開催地

第 57 回大会は関東地区会が担当し、2010 年 3 月に千葉にて行うことが承認された。

3. 第 58 回大会（2011 年）担当地区会

第 58 回大会は北海道地区会が担当することが承認された。

4. 名誉会員推薦について

川那部浩哉氏が名誉会員に推薦され、総会にて承認された。

略歴

1932（昭和 7）年 5 月 10 日生
1955（昭和 30）年 3 月　京都大学理学部動物学科卒業
1960（昭和 35）年　京都大学理学部助手
1967（昭和 42）年　同助教授
1977（昭和 52）年　同教授
1993（平成 5）年　京都大学生態研センター長・教授（専任、同理学部教授併任）
1996（平成 8）年　京都大学退官、滋賀県立琵琶湖博物館館長

日本生態学会役員履歴

1984-1986 年　幹事長
1986-1987 年　日本生態学会誌編集委員長
1987 年　将来計画委員会　委員長
1988-1991 年　会長
1996-1997 年　会長

C. 審議事項

1. 2008 年度予算案について

2008 年度予算案が決議された。

一般会計

収入の部	07 決算	08 予算	支出の部	07 決算	08 予算
会費			会誌発行費		
一般会員	31,495,900	30,500,000	ER	19,620,615	19,600,000
学生会員	6,069,400	6,100,000	生態誌	6,737,205	4,200,000
団体会員	3,259,000	2,800,000	保全誌	1,336,583	1,600,000
賛助会員	20,000	20,000	ニュースレター	1,197,787	1,200,000
外国会員	275,600	270,000	編集費	273,958	100,000
和文誌購読	752,200	750,000	小　計	29,166,148	26,700,000
小　計	41,872,100	40,440,000	会議費	151,217	150,000
			旅費・交通費	2,032,051	2,000,000
ER 売上還元金	749,468	750,000	人件費	15,732,414	13,000,000
Back No. 売り上げ	42,500	40,000	地区会へ還元金	1,552,716	2,000,000
科研費補助金	11,400,000	8,500,000	公開講演会	910,886	1,200,000
出版印税	390,852	400,000	INTECOL 会費	427,576	430,000
利子収入	47,760	40,000	事務費		
広告代	180,000	180,000	通信費	889,658	900,000
著作権使用料	200,906	200,000	消耗品費	166,995	170,000
ER 超過ページ代	1,099,500	300,000	雑費	434,562	250,000
大会収入	16,150,080	18,000,000	銀行手数料	133,695	130,000
講習会費		200,000	レンタル料	418,000	420,000
前年度繰越金	29,765,537	28,745,940	事務所賃貸料・電気代	1,680,000	1,680,000
			会計監査（税理士）	378,000	378,000
			小　計	4,100,910	3,928,000
			各種委員会費	932,650	1,530,000
			大会支出	14,808,482	18,000,000
			名簿作成費	2,848,874	0
			選挙費	388,839	0
			EAFES 費用	100,000	100,000
			次年度繰越金	28,745,940	28,757,940
合　計	101,898,703	97,795,940	合　計	101,898,703	97,795,940
単年度収入	72,133,166	69,050,000	単年度支出	73,152,763	69,038,000

特別会計 I（宮地基金）

収　入　の　部			支　出　の　部		
	07 決算	08 予算		07 決算	08 予算
前年度繰越金	4,694,484	4,099,545	宮地賞賞金	600,000	400,000
預金利息	5,061	0	次年度繰越金	4,099,545	3,699,545
合　　計	4,699,545	4,099,545	合　　計	4,699,545	4,099,545

大島基金

収　入　の　部			支　出　の　部		
	07 決算	08 予算		07 決算	08 予算
前年度繰越金	10,000,396	10,011,929	大島賞賞金	0	200,000
預金利息	11,533	0	次年度繰越金	10,011,929	9,811,929
合　　計	10,011,929	10,011,929	合　　計	10,011,929	10,011,929

2. 定款案について

日本生態学会の法人化に向け、学会としてどのように取り組んでいるかについて矢原徹一会長より説明があった。

まずこれまでの法人化の流れとして、日本生態学会では鷲谷いづみ会長から菊澤喜八郎会長をへて法人化に向けた準備を進めてきていること、および国会で 2006 年 5 月に公益法人 3 法が成立したことが報告された。

つづいて法人化の必要性が述べられ、日本生態学会としては NPO 法人ではなく公益社団法人を目指していくことが確認された。公益社団法人を目指す上での公益認定基準についての一般的な条件の説明に加えて、事業の位置づけと税の問題についての説明がおこなわれた。

定款案の説明があり、学会ウェブサイトですでに公表されていること、およびそれに対する意見も出ていることが報告された。定款案ではこれまでの学会組織を法人としての組織に変更する必要があり、会長は代表理事、幹事長は専務理事になるなどの名称変更とともに、代議員制を採ったうえで代議員が法律上の社員となることなどが紹介された。総会の議決事項や理事会の権能などについての説明、事業の区分（公益目的事業、収益事業、管理事業）についての具体的事例の紹介、および地区会組織の変更案などが示された。

この定款案をベースにして、公益法人化の準備を進めることが了承された。

Ⅱ．第 55 回 日本生態学会大会の記録

第 55 回 日本生態学会大会（JES55）は、福岡国際会議場を会場として 2008 年 3 月 14 日～ 3 月 17 日に開催されました。

大会期間中に公開講演会 1、シンポジウム 15、フォーラム 5、企画集会 20、自由集会 19、一般講演（口頭発表）238、一般講演（ポスター発表）931、が行われました。参加者は 1972 名でした。4 日間の日程とポスター賞（日本生態学会公認表彰）受賞者は以下の通りです。

日　程

3 月 14 日　各種委員会（大会企画委員会、日本生態学会誌刊行協議会、Ecological Research 刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会）、全国委員会、企画集会、自由集会

3 月 15 日　シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭発表）、一般講演（ポスター発表）、企画集会

3 月 16 日　公開講演会、各賞授賞式、日本生態学会賞受賞者挨拶、功労賞受賞者挨拶、宮地賞受賞講演、大島賞受賞講演、総会、フォーラム、一般講演（ポスター発表）、企画集会、自由集会

3 月 17 日　シンポジウム、一般講演（口頭発表）、一般講演（ポスター発表）、懇親会

3 月 18 日　エコカップ 2008（親善フットサル大会）

ポスター賞受賞者

＜群落＞

優秀賞

○小林誠（北大・環境科学），吉田国吉（芽室町），甲山隆司（北大・環境科学）
分布フロントのブナ林にブナのスペシャリスト植食性鱗翅目は追随分布しているか？―森林帯境界域における樹木群集の地理的推移と植食性鱗翅目の種組成―

○平田晶子，上條隆志（筑波大･生命環境），齊藤哲（森林総研）
照葉樹林に生育する維管束着生植物のハビタット特性

○長谷川奈美（農工大院・農），星野義延（農工大），原慶太郎（東京情報大），鎌形哲稔（東京情報大院）
高分解能衛星データを用いた森林優占型判別と植生図化―千葉県の里山地域を例として―

＜植物個体群＞

最優秀賞

○山崎実希，清和研二（東北大院・農）
ミズキの生育段階に伴う空間分布パターンの変化―母樹からの距離依存的な病害の影響―

優秀賞

○内藤弥生，佐藤志津子，大原雅（北大･院･環境科学）
海進の影響を受けた石狩低地帯におけるオオバナノエンレイソウの集団分化に関する研究

＜フェノロジー＞
優秀賞
○後藤龍太郎（京大・人環），岡本朋子（京大・人環），川北篤（京大・人環），加藤真（京大・人環）
カンコノキ－ハナホソガの絶対送粉共生系における開花フェノロジーの多様性
○相川慎一郎，工藤洋（神戸大･院理），清水健太郎（チューリヒ大・理）
シロイヌナズナ属多年草における開花抑制遺伝子 FLC の発現フェノロジー

＜動物繁殖＞
優秀賞
○太田和孝，幸田正典（大阪市大・理）
複数の繁殖戦術を持つカワスズメ科魚類の精子競争
○高橋佑磨，渡辺守（筑波大・生命環境）
モテる雌とモテない雌の適応度：アオモンイトトンボの雌に生じる色彩 2 型
○田島裕介，渡辺守（筑波大・生命環境）
交尾中のアジアイトトンボにおける雄の交尾器形態と精子置換

＜行動＞
最優秀賞
○馬場成実（九大院・生防研），弘中満太郎（浜松医大・生物），細川貴弘（産総研），柳孝夫，稲富弘一，野間口眞太郎（佐賀大・農），日下部宜宏，河口豊（九大・農），上野高敏（九大院・生防研）
孵化後栄養卵がシロヘリツチカメムシ 1 齢幼虫にとって不可欠な理由
優秀賞
○細川貴弘（産総研・生物機能工学），弘中満太郎（浜松医科大・生物），稲富弘一（佐賀大・農），馬場成実（九大院・生防研），深津武馬（産総研・生物機能工学）
子の世話をするツチカメムシ類における腸内共生細菌の垂直伝播メカニズム
○谷中智紀，牧野崇司，大橋一晴（筑波大・生命環境）
マルハナバチの‘ゆずりあい’採餌：他人にきびしく、身内にやさしく？
○坂本信介（都立大・院・理）
アカネズミ雌のなわばり争い― dear enemy である時とない時―
○高橋聖生（信大・理生物），半田千尋（京大・教育），市野隆雄（信大・理生物）
アリによる選択的捕食がもたらすアブラムシの進化
○土屋香織（首都大・院・理），林文男（首都大）
カワトンボ類における精子の質に関する配偶者選択の可能性

＜社会生態＞
優秀賞
○嶋田敬介，前川清人（富山大院・理）
ゴキブリ類における社会性の発達とセルラーゼ遺伝子発現量の変化
○森英章（東北大・生命），佐々木智基（琉球大・農），長谷川英祐（北海道大・農），土畑重人（東京大・総合文化），千葉聡（東北大･生命），辻和希（琉球大･農）
働かない働きアリの侵略―アミメアリの種内社会寄生は 2 度進化した？―
○川津一隆（京大院･農･昆虫生態），松浦健二（岡大院･環境），藤崎憲治（京大院・農・昆虫生態）
ヤマトシロアリにおけるワーカーの給餌行動は幼虫の要求によって変わるか？

＜保全＞
最優秀賞
○橋本佳延（兵庫県博），服部保（兵庫県立大・自然研）
西日本におけるタケ類天狗巣病による竹林衰退の現状
○松山奈央（東京農工大･農），鎌形哲稔，原慶太郎（東京情報大・院・総合情報），梶光一（東京農工大・農）
千葉県におけるニホンリスの生息分布変化とその要因
優秀賞
○岡本実希，西廣淳（東大･院･農），赤坂宗光，中川惠，佐治あずみ，高村典子（国環研）
釧路湿原シラルトロ湖における沈水植物の分布と環境要因との関係
○山崎梓（新大・農），石田真也（新大院・自然科学），高野瀬洋一郎（新大･超域研究機構），紙谷智彦（新大院･自然科学）
河川域における植物種多様性のホットスポットとしてのワンド
○江戸謙顕（文化庁･記念物課），北西滋，小泉逸郎（北大･院･地球環境），秋葉健司（HuchoWorks），野本和宏（北大・院・環境科学），大光明宏武（酪農学園大・地域環境），山本俊昭（日獣大･獣医），東正剛（北大･院･地球環境）
ミトコンドリア DNA 解析による希少種イトウの遺伝的構造
○稲本雄太，桜谷保之（近畿大学農学部）
里山林に伴った大学キャンパスにおける生態系（4）絶滅危惧種ベニイトトンボの生態と保全
○加藤倫之，吉尾政信，宮下直（東大･農･生物多様性）
水田環境と周辺の景観構造がカエル類の卵・幼生・幼体に与える影響
○岩田卓也，山下雅幸，澤田均（静岡大・農）
富士川におけるカワラサイコの集団サイズと種子生産
○野副健司，西廣淳，鷲谷いづみ（東大・農）
植物の多様性のホットスポットである浮島湿原（霞ヶ浦）におけるカモノハシの指標性

＜遷移・更新＞
最優秀賞
○安藤真理子（東北大・農），清和研二（東北大・農）
落葉広葉樹数種の種子発芽におけるギャップ検出機能― R/FR 比と変温の相対的重要性―
○小出大（横国大院・環境情報），持田幸良（横浜国大）
太平洋側分布下限域のブナ個体群に与えた気候変動の影響

優秀賞
○富田啓介（名古屋大・院・環境）
湧水湿地内に見られる植生の分布と変化の要因：土砂の移動が鍵を握るのか？
○神岡新也，二宮生夫（愛媛大・農学研究科）
四国・大野ヶ原ブナ林における主要樹種の齢構造と共存機構
○西村愛子，露崎史朗（北大・環境科学）
人為撹乱による養分利用特性の改変が植生回復に与える影響―泥炭採掘跡地での窒素施肥実験による検証

＜動物群集＞
最優秀賞
○北村智之，宮下直（東大・農・生物多様性）
シカが土壌動物群集に与えるインパクトの状況依存性：ギャップ・非ギャップの比較
優秀賞
○細将貴（京大・理）
島の生物地理学と共進化：種数－面積関係で解くカタツムリとカタツムリ食ヘビの共進化過程
○南波興之（北大・低温研），大舘智氏（北大・低温研）
オオアシトガリネズミによる土壌生態系に及ぼす影響
○酒井陽一郎（京大生態研），武山智博（新潟大），苅部甚一，小板橋忠俊，陀安一郎（京大生態研），由水千景（JST），永田俊，奥田昇（京大生態研）
動物プランクトン群集の栄養段階の時空間変動とそれをもたらす要因

＜送粉＞
最優秀賞
○長谷川陽一，陶山佳久，清和研二（東北大院・農）
クリの訪花昆虫に付着した花粉一粒ずつの DNA 分析による送粉パターンの解析

＜古生態＞
優秀賞
○河野樹一郎, 西村亮, 高原光, 中村麻子（京都府大･農），井上淳（大阪市大･理），松下まり子（奈良文化財研究所）
琵琶湖東岸部における過去 3000 年間の火事および農耕活動に伴う植生の変化

＜景観生態＞
優秀賞
○楠本良延（農環研），徳岡良則（農環研），山田晋（農環研），小柳知代（東大院），森田紗綾香（農環研），平舘俊太郎（農環研），山本勝利（農環研）
平野部に分布する二次草地は歴史性を反映している
○佐藤真弓（京大・生態研），三橋弘宗（人と自然の博物館），神松幸弘（地球研），椿宜高（京大・生態研）
都市域に生息する 2 種のイトトンボの遺伝構造に影響を与える景観要素

＜種子散布＞
最優秀賞
○高山浩司（千葉大・院・理），邑田仁，立石庸一，梶田忠
汎熱帯海流散布植物オオハマボウ（アオイ科）の分子系統地理～大洋を越えた種子散布と種分化～

＜物質循環＞
最優秀賞
○潮雅之，和穎朗太，北山兼弘（京大･生態研センター）
熱帯林生態系におけるポリフェノール動態への樹木種の影響
○石川尚人（京大・生態研），内田昌男（環境研），陀安一郎（京大・生態研）
14C を用いた河川生態系の食物網における炭素起源推定
○福島慶太郎（京大院･農），徳地直子（京大フィールド研）
林齢の異なるスギ人工林土壌における微生物バイオマスと養分循環
優秀賞
○廣田充（筑波大･菅セ），張鵬程（筑波大･院･生命環境），高橋健太，根岸正弥（茨城大・院・理工），下野綾子，沈海花，唐艶鴻（国環研・生物）
チベット高山草原の標高傾度に伴う生態系 CO_2 フラックスの特性
○中尾拓貴（広島大･総科），佐々木晶子（産総研･中国セ），萩森優，吉竹晋平，中坪孝之（広島大・院・生物圏）
河口干潟における CO_2 フラックスと微生物群集に対するアナジャコの巣穴形成の影響

＜動物個体群＞
最優秀賞
○黒江美紗子，宮下直（東大・農）
カヤネズミ・メタ個体群のサイズと構造に与える景観マトリクスの影響
優秀賞
○服部充（信大・理），市野隆雄（信大・理）
真社会性アブラムシの兵隊個体における防衛形態形質の季節変動
○宇津野宏樹（信大・理），浅見崇比呂（信大・理）
巻貝のゆらぎ左右性と発生拘束

＜外来種＞
優秀賞
○井上真紀（東大・農），横山潤（山形大・生物），鷲谷いづみ（東大・農）
外来種セイヨウオオマルハナバチの野生化集団における女王の体サイズと適応度
○亘悠哉（東大），阿部愼太郎（環境省那覇事務所），山田文雄（森林総研），宮下直（東大）
系外資源の年変動と繁殖価の季節性を考慮した外来種管理―奄美大島におけるマングース対策試論―
○安野翔，千葉友紀（東北大・院・生命），進東健太郎，藤本泰文，嶋田哲郎（伊豆沼・内沼環境保全財団），鹿野秀一，菊地永祐（東北大・東北アジア研）
炭素・窒素安定同位体比を用いたオオクチバス当歳魚

の餌資源解析
○山西陽子（奈良女子大･理），遊佐陽一（奈良女子大･理）
大和川水系におけるスクミリンゴガイに対する天敵の捕食効果
○三宅もえ，宮下直（東大・農）
外来種 4 種を含む生物群集における捕食－被食関係

＜動物と植物の相互関係＞
最優秀賞
○岩渕翼，占部城太郎（東北大・生命）
藻類のリン／炭素比と藻食者の成長応答：ミジンコ類の種間比較
優秀賞
○小暮慎一郎（北大・環境科学院），中村誠宏（北大・苫小牧），日浦勉（北大・苫小牧），戸田正憲（北大・低温研）
林冠木個体への強い食害に対する植物と昆虫群集の時間遅れの応答

＜進化＞
最優秀賞
○北村淳一，曽田貞滋（京大･理･動物），中島淳（九大･農）
淡水二枚貝類との産卵共生関係を介したタナゴ亜科魚類の卵形の進化
優秀賞
○山本哲史，曽田貞滋（京都大・理・院）
日本産フユシャク類の系統地理
○井川拓也（北大院･水産科学），岸田治（京大･生態研セ），西村欣也（北大院・水産科学）
種内捕食－被食相互作用における対抗的表現型可塑性
○後藤今日子，浅見崇比呂（信大・理・生物）
左右反転変異の鏡像対称ではない発生が適応度を下げる

＜動物生活史＞
優秀賞
○儀間朝宜（琉球大・農），辻和希（琉球大・農）
ウスキシロチョウにおける翅型決定要因と密度効果
○浅野由佳理（北大水産），岸田治（京大生態学研究セ），西村欣也（北大水産科学）
エゾサンショウウオ幼生の生息環境の変化に応じた可塑的な体色パターン

＜都市＞
最優秀賞
○松田尚子（首都大院･理工･生命），小林まや（首都大院･理工・生命），坂本信介（都立大・院・理），鈴木惟司（首都大・生命科学）
都市の孤立林を利用する哺乳類における種間関係の検討―自動撮影装置によるアプローチ―
優秀賞
○伊藤千恵，藤原一繪（横浜国大・院・環境情報）
都市域森林群落における常緑低木種の分布特性

＜生態系管理＞
最優秀賞
○山本悠子（農工大・農），宮木雅美（道環研），高橋裕史（森林総研），小平真佐夫，岡田秀明，山中正実（知床財団），梶光一（農工大・農）
対照的な二地域におけるエゾシカ生息地の質と量による評価
優秀賞
○阪口翔太（京大・農），藤木大介（兵庫県大），井上みずき，高柳敦，藤崎憲治（京大院・農）
ニホンジカの過採食圧下で芦生天然林植生はどう変わったか―大規模防鹿柵実験 1 年の効果とあわせて―

＜分子＞
最優秀賞
○森長真一（九大・理），宮崎さおり（基生研），酒井聡樹（東北大･生命科学），長谷部光泰（基生研･総研大）
閉鎖花の分子基盤：コカイタネツケバナをモデルにしたマイクロアレイと RNAi 解析
優秀賞
○下野綾子（環境研），上野真義（森林総研），津村義彦（森林総研），古松（中国科学院），唐艶鴻（環境研）
チベット高原の矮性低木キンロバイの遺伝的多様性

＜種多様性＞
最優秀賞
○佐々木雄大，大久保悟，岡安智生（東大・農），ジャムスランウンダルマ（モンゴル農大），大黒俊哉，武内和彦（東大・農）
モンゴルの放牧地生態系における中規模撹乱仮説の一般性および土地管理への適用性
優秀賞
○新垣誠司（琉大・理工），土屋誠（琉大・理）
島嶼系潮間帯における魚類群集の構造と多様性
○松林圭（北大･院理），Sih Kahono（LIPI），片倉晴雄（北大・院理）
好き嫌いは種分化の始まり：寄主変更がもたらす集団分化のインパクト

＜植物生活史＞
優秀賞
○井田崇，工藤岳（北大・院・環境科学）
光環境の季節性が作り出す植物の生産と繁殖のパターン～落葉広葉樹林の林床植物にみられる資源利用特性～
○市橋隆自，舘野正樹（東大・院・理・日光植物園）
ホスト樹冠における木本性つる植物の多様な戦略
○川合由加，工藤岳（北大・環境科学）
生育期間の違いが一回繁殖型多年草ミヤマリンドウのシュート成長と生存に及ぼす影響

＜植物生理生態・物質生産＞
最優秀賞
○永野聡一郎（東北大・院・生命科学），中野隆志（山

梨環境研），彦坂幸毅（東北大・院・生命科学），丸田恵美子（東邦大・理）
風衝ストレス下にある常緑針葉樹ハイマツの光合成特性

優秀賞
○中路達郎（国環研），野口享太郎（森林総研），小熊宏之（国環研）
根圏分類における可視－近赤外分光画像の利用
○岡島有規，野口航，寺島一郎（東大院・理）
熱収支から考える林床草本の生存戦略
○三田村理子（茨城大・理），中野隆志（山梨県・環境科学研），山村靖夫（茨城大・理）
雪崩撹乱による環境変化がシラビソ稚樹の光合成に与える影響
○立石麻紀子（九大・福岡演習林），熊谷朝臣（九大・宮崎演習林），陶山佳久（東北大･院･農），日浦勉（北大・苫小牧研究林）
ブナの水利用様式の地理変異
○神山千穂（東北大･生命科学），及川真平（京都工繊大･生物資源セ），彦坂幸毅（東北大・生命科学）
異なる標高の湿原植物群集における空間構造と光獲得競争の季節変化

＜数理＞
優秀賞
○堀部直人（東大・総文），池上高志（東大・総文），嶋田正和（東大・総文）
記憶力が適応戦略に与える影響：Levy or not Levy, that is the question
○鈴木清樹（九大・理・生物），佐々木顕（総研大・葉山高等研）
植物病原菌の越冬と分布域の拡大―生活史の違いにみる病原菌と植物の伝播戦略―

＜植物繁殖＞
優秀賞
○新垣誠司（琉大・理工），土屋誠（琉大・理）
島嶼系潮間帯における魚類群集の構造と多様性
○竹内やよい（京都大），田中健太（シェフィールド大），中静透（東北大）
フタバガキ科 4 種のジーンフローパターンの比較

Ⅲ．書評依頼図書（2007 年 11 月～ 2008 年 7 月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はＥメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 中道正之著「ゴリラの子育て日記－サンディエゴ野生動物公園の優しい仲間たち－」（2007）230pp. 昭和堂　ISBN:978-4-8122-0765-9
2. 太田誠一編「生物資源から考える 21 世紀の農学第 4 巻森林の再発見」（2007）404pp. 京都大学学術出版　ISBN:978-4-8769-339-1
3. 長澤良太・原慶太郎・金子正美編「自然環境解析のためのリモートセンシング・GIS ハンドブック」（2007）258pp. 古今書院　ISBN:978-4-7722-4109-0
4. 渡辺守著「昆虫の保全生態学」（2007）200pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-062215-8
5. 針山孝彦著「生き物たちの情報戦略」（2007）248pp. 化学同人　ISBN:978-4-7598-1311-1
6. 藤原晴彦著「似せてだます　擬態の不思議な世界」（2007）208pp. 化学同人　ISBN:978-4-7598-7302-93
7. 『変わりゆく信州の自然』編集委員会編著「変わりゆく信州の自然」（2008）140pp. ほおずき書籍　ISBN:978-4-434-11557-8
8. 財団法人日本学術協力財団「学術会議叢書 14　性差とは何か」（2008）312pp. ISBN:978-4-939091-23
9. R.Flindt 著・浜本哲郎訳「数値でみる生物学 生物に関わる数のデータブック」（2007）290pp. シュプリンガー・ジャパン　ISBN:978-4-431-10014
10. 石川統編「生物学第 2 版」（2008）234pp. 東京化学同人　ISBN:978-4-8079-0674-1
11. 種生物学会編「共進化の生態学：生物間相互作用が織りなす多様性」（2008）368pp. 文一総合出版　ISBN:978-4-8299-1069-6
12. 正木隆編「森の芽生えの生態学」（2008）264pp. 文一総合出版　ISBN:978-4-8299-1070-2
13. 日本生態学会編「エコロジー講座　森の不思議を解き明かす」（2008）88pp. 文一総合出版　ISBN:978-4-8299-0135-9
14. 深泥池七人委員会編集部会編「深泥池の自然と暮らし―生態系管理をめざして―」（2008）248pp. サンライズ出版　ISBN:978-4-88325-357-9
15. 本川雅治編「日本の哺乳類学①　小型哺乳類」（2008）320pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-064251-4
16. エコソフィア編集委員会　編「エコソフィア 20 号」（2008）124pp. 昭和堂　ISBN:978-4-8122-0810-6
17. Takayuki Ohgushi, Timothy P. Craig and Peter W. Price「Ecological Communities Plant Mediation in Indirect Interaction Webs」（2008）444pp. CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS　ISBN:0-521-85039-8
18. 本田裕子著「野生復帰されるコウノトリとの共生を考える」（2008）320pp. 原人舎　ISBN:978-4-925169-17-2
19. 高槻成紀・山極寿一編「日本の哺乳類学②　中大型哺乳類・霊長類」（2008）480pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-064252-1
20. 出川通著「『理科少年』が仕事を変える､会社を救う」（2008）192pp. 彩流社　ISBN:978-4-7791-1032-0
21. 長谷川順一著「栃木県の自然の変貌」（2008）182pp. 自刊
22. 加藤秀弘編「日本の哺乳類学③　水生哺乳類」（2008）296pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-064253-8

Ⅳ．寄贈図書

1. 「Progress in Informatics　No.5」（2008）156pp. 国立情報学研究所
2. 「みどりいし　No.19」（2008）46pp. 財団法人熱帯海洋生態研究振興財団
3. 「第 23 回国際生物学賞　記録」（2008）40pp. 独立行政法人日本学術振興会国政生物学賞委員会
4. 「日本学士院ニュースレター　第 1 号」（2008）20pp. 日本学士院
5. 「いのちは支えあう　第 3 次生物多様性国家戦略」（2008）24pp. 環境省　自然環境局
6. 「果樹研究所研究報告」（2008）42pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所
7. 「作物研究所研究報告　No.9」（2008）120pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所
8. 「多摩川　第 118 号」（2008）12pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団「第 57 回　東レ科学振興会科学講演会記録　プレートの沈み込みとその行方」（2007）40pp. 財団法人　東レ科学振興会
9. 「うみうし通信　No.59」（2008）12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
10. 「果樹研究所ニュース No.21」（2008）8pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構

Ⅴ．後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 2008 年度コスモスセミナー自然観察教室
「集まれ昆虫好きな子供たち 2008」
　日時：2008 年 8 月 4 日（月）～ 8 月 6 日（水）
　場所：関西学研都市・清滝・室池地区「アイ・アイ・ランド」
2. 国際シンポジウム「侵略的外来哺乳類の防除戦略～生物多様性の保全をめざして～」
　会期：2008 年 10 月 27 日（月）～ 31 日（金）
　会場：沖縄産業支援センター
3. 国際甲殻類学会東京大会
　日時：2009 年 9 月 20 日（日）～ 23 日（水）
　会場：東京海洋大学
4. 平成 20 年度「女子中高生夏の学校 2008 ～科学・技術者のたまごたちへ～」
　期間：平成 20 年 8 月 14 日（木）～ 16（土）
　場所：国立女性教育会館

お　知　ら　せ

1．公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 平成 21 年度笹川科学研究助成

①【学術研究部門】
・一般科学研究：優れているが他から助成の得難い研究の奨励と、研究者の育成
・海洋・船舶科学研究：優れた視点を持つ研究の奨励と、国際的に通用する研究者の育成
【実践研究部門】
・実践研究：様々な現場における社会的要請の高い研究への支援
②【学術研究部門】1 研究計画 100 万円限度
【実践研究部門】1 研究計画 50 万円限度
③募集期間：2008 年 10 月 1 日（水）～ 10 月 15 日（水）必着
④財団法人日本科学協会　笹川科学研究助成係
〒 107-0052　東京都港区赤坂 1-2-2
日本財団ビル 5F
TEL: 03-6229-5365　FAX: 03-6229-5369

(2) 鹿島学術振興財団 2008 年度研究助成

①都市・住居環境の整備（都市並びに住居環境の向上、災害・公害の防止、交通・輸送力の向上）
国土・資源の有効利用（国土の有効利用と保全、海洋の利用と保全、水資源の確保と有効利用、エネルギーおよび資源の有効利用・輸送・貯蔵、廃棄物の処理と再資源化
文化的遺産・自然環境の保全（文化的遺産の保全、自然環境の保全）
②総額 4,500 万円、1 件あたり 300 万円
③ 2008 年 11 月 20 日（木）
④日本生態学会事務局（学会推薦が必要です）

(3) 第 12 回　尾瀬賞

①泥炭湿原の保全に関わる基礎的研究において、優れた業績を上げた個人・グループ
② 2 名以内。1 名につき賞状および賞金 100 万円。
③平成 20 年 10 月 31 日（当日消印有効）
④財団法人尾瀬保護財団事務局「尾瀬賞」係
〒 371-8570　群馬県前橋市大手町一丁目 1-1
群馬県庁 17 階
電話：027-220-4431　ファックス：027-220-4421

(4) 第 47 回（平成 20 年度）　下中科学研究助成金

①全国小、中、高校の教員（教育センター、盲・聾・養護学校を含む）を対象とし、研究は個人であると共同であるとを問いません。
②総額 900 万円。1 件当り 30 万円。30 件を予定。
③平成 20 年 12 月 10 日（当日消印有効）
④財団法人下中記念財団事務局
〒 162-0843　東京都新宿区市谷田町 2-7
伊東ハイム 301 号
TEL: 03-5261-5688　FAX: 03-3266-0352

書　評

① M. L. モリソン著　梶光一・神崎伸夫監修（2007）「生息地復元のための野生動物学」136pp. 朝倉書店　本体価格 4300 円　ISBN:978-4-254-180-29-9
②三浦慎吾著「ワイルドライフ・マネジメント入門」（2008）123pp. 岩波書店　本体価格 1200 円　ISBN:978-4-00-007485-8

申しわけないことであるが、評者は①の原著（M. L. Morrison: Wildlife Restration: Techiques for Habitat Analysis and Animal Monitoring. 2002）を見ていない。

ただ訳本の表題と監修者の名に惹かれて手にしたのである。実はかなり以前に本書の書評は脱稿していたが、諸般の事情から学会事務局に送付せずにいた。そこへ②の出版が伝えられ、やがて実物の送本を受けた。一読すると、①の書評で言いたかったかなりが、②で取り上げられている。

たとえば生息地（habitat）の面積として、①でパッチがどうの、コリドーがどうのと聞かされた挙句、ピューマの個体群維持に 10 年間に 1 ～ 4 頭の移入があるとしても絶滅の確率を低く押さえるためには最小 2,000 km^2 程度が必要という結論を導いてもらっても全く意味がない。その面積に数百万人がひしめいているわが国の大阪府となにか共通の法則をみいだそうとするのはそもそも無理があると思う。という次第で、①、②を合わせて感想を述べて書評とさせていただく。

それはさておき、ここ数年前から「生態工学」という分野が進められている。いうまでもなく生物の世界は分子（遺伝子）から組織、個体など、いくつものレベルとして考えることが必要である。「遺伝子工学」や「細胞工学」というものもあり、それぞれの地位もえている。また「種」ないしはそれに近い内容のメタ個体群の保全・復元については、国際的な取り組みだけでなく、たとえばコウノトリやイリオモテヤマネコなどのように、わが国においても野生動物での保全・復元の実績をあげている事例も報告されている。しかしそれはせいぜい注目する種とその種を取り巻く食物・腐食関係（ニッチ：niche）の調査、検討にすぎず、種のレベルを越えての「生物群集：biotic community」や「生息地」の保全・回復についての議論はすくない。

評者は自然回復に取り組んでおられる方たちからの相談を受けることがある。その中では、いわゆるアセス段階でのインベントリー調査で「――生息の可能性があり注意を要する。」、「――事業開始にあたってはさらに調査が必要である。」とされた区域が、改めての調査で非常に重要な種なり、群集の生息地であることが判明し、対策を迫られるケースがある。事業の進展に応じて動・植物の生息・生育地をいかに保全するかについての相談も少なくない。アセスでは事業の実施にあたって環境への負荷をできるかぎり回避、低減することが義務づけられている。いわゆるミテイゲーションである。本来ならその前に「何を、なぜ保全する・保全せねばならないのか」という議論があるべきなのだが、たいていのアセス審議では、ビオトープと称する、日本造園お得意の「ミニチュア自然:箱庭」をつくっておくことでパスとなる。

さて両書に使われている野生動物：［野生動物：ワイルドライフ（wildlife）］とはどんな仲間か。通常は陸生の哺乳類と鳥類を指し、狩猟対象を指すゲーム（game）と混同して用いられることもある。最近では①のように爬虫類と両生類も含むことがあるが、逆に魚類や貝類などの水生動物は含まない。が、水生の哺乳類であるクジラやイルカは［野生］動物にいれて扱うこともある。漁業の水産物と同じ感覚である。もともとはきのこや薬草と同じく森林の副産物としての狩猟（女子や子供の仕掛けるワナも集計すれば大きい数値となる）の成果品を指す言葉だろう。restor といういい方がそれを象徴している。昆虫などの無脊椎動物は、もともと wildlife には入れられていない。

人間はいろいろな内容の自然と向かい合っていかねばならないし、その間にいろいろな軋轢が生じるのもまた当然である。生態学・野生動物学はそれなりの解決法を考えてきてた。そのひとつが「自然淘汰」によるもので、「野生動物は無限に増加することはない。しかるべき数値（個体数、密度）で人間と妥協することができるはず」というものである。①ではその数値の計測手法にかなりのページを割いており、②では野生動物との妥協に三つの主要課題をあげ、解決には公的な責任があることと求めている。いずれにせよ人間の生活と野生動物のそれとはどこかで対立しており、妥協できるとしても人間サイドで考慮するものとしている。そこでは「野生動物の増加には限界がある」としており、その限界は二つの要因、内的な自然増加率 r と外的な環境収容力 K で表せるとする。r は進化的な遺伝子レベルで決定されているが、栽培と畜養という技術がそれを変えた。次の攻略目標は K である。

これまでの「生息地」への影響とか、「生息地」の復元とか述べてきたが、「生息地」とは一体何を指しているのだろうか。各種の生物学や生態学の辞典でも「生息地」という言葉は索引にあっても、術語としては扱っていないようである。一般用語としての「生息地」を動物の生活の場所として考えると、三つほどの要因があろう。第一は食の関係である。食べること、食べられることが含まれる。第二には休息の場である。ここで取り上げられる野生動物は、近時の調査によると、一日のうちの三分の二は休んでいる。第三の場はいうまでもなく、繁殖のための巣とその周辺である。一口にまとめると「食う・寝るところに・住むところ」である。そしてその根源は「水行末、雲来末、風来末」、すなわち生態系のなかでの水と大気の流れの来るところ、行くところである。

（朝日　稔）

寺澤和彦・小山浩正編（2008）「ブナ林再生の応用生態学」310pp. 文一総合出版　本体 3600 円　ISBN:978-4-8299-1071-9

病気や捕食者から逃れ、繁殖して子どもを残すのが、生物の生きる目的と言ってもよいもっともだいじなこと

である。自然淘汰によって、生物はこのような術を獲得してきている。捕食者から逃れるには、移動して文字通り逃げてしまう空間的なエスケープや、時間をずらすことにより逃れる時間的エスケープがある。7 年や 17 年という間隔をおいて大量に発生するセミなども時間的な逃避仮説によってその理由が説明されている。通常の年はきわめて低い密度であれば、セミを食う捕食者の数も低く保たれる。そして何年かに一度､大量に出現すれば、それを食い尽くすことはとてもできない。仮説というよりも既に生態学の一つの重要な理論といってよいほどの洗練をとげている。

移動することのできない樹木が捕食を逃れるには時間的な逃避が有効となる。樹木が何年かに一度、一斉に花を咲かせる一斉開花現象（マスティング）の進化的意義（究極要因）もまた、花や種子の捕食者からの逃避により説明される。これが本書第 1，2 章で解説されている、本書の中心をなす基本概念である。つまり捕食者の数よりも餌の数のほうが圧倒的に多くなるために、捕食者は飽食し餌となる種子は食べ残され、多くの子孫が生き残るのだというわけである。温帯落葉広葉樹林の優占樹種であるブナも、5 年とか 7 年に一度開花・結実する。長期間の変動データを用いて他の有力仮説（受粉効率仮説）も合わせて検証してみると、捕食者飽食仮説がブナの開花・結実をうまく説明できることがわかった。またそのような変動が生じるメカニズムとしても、余剰の光合成産物の蓄積が必要なこと（つまり前の年に開花・結実して蓄積を使い尽くしていないこと）、そして花芽生産の合図となる低温が必要とされることなどが、観察と実験の結果わかってきた。もしそうなら、ブナをうまく更新させるためにはどのようにすればよいのだろうか？こんどはブナ林を再生させるための技術課題であり、本書の著者たちが苦闘してきた応用生態学の課題である。

ブナの種子が大量に結実するためには、当然、大量の開花が必要である。しかし、それだけでは十分でない。ブナヒメシンクイなど花・種子を食う昆虫類から逃れなければならない。昆虫の密度が高いと逃れることができないから、昆虫の密度が低いことと、大量開花することの両者が揃うことが必要十分条件となる。これが、著者たちが継続してきたブナの開花・結実の長期観察から得られた一つの結論である。ではこの基礎的成果をブナ林再生技術にまで仕上げるにはどうすればよいか？開花数はシードトラップを仕掛けておいて、落下してくる雄花などを計測すれば比較的簡単にわかる。昆虫のほうもトラップを仕掛ければ捕まえられそうなものだが、花・実を食う昆虫が 1 種類とは限っていないので、けっこう難しい。しかし、捕食者飽食仮説に立ち帰ってみれば、かならずしも昆虫の数を知る必要はない。今年の開花数が少なく、翌年の開花数が多ければ、捕食者から逃れることができるが、今年の開花数が多ければ、捕食者数もそれに見合って多いから、来年少々花が多くても、捕食者からエスケープできないのである。そこで、答えはこうだ。今年と翌年の 2 年間の花の数とその比率が問題なのである。今年の花が少なく、来年の花が多い年にのみ、大量結実が期待できるのだ。これは基礎理論のもっとも見事な応用的展開といえるだろう。

今年の花はトラップで採集した花数で表現できる。来年の花は？これは秋に、翌年に開芽するべき芽を観察すればわかる。ただしこの方法はトラップを仕掛けた森林でないと適用できない。この課題もまた意外に簡単にクリアできた。今年の、いや数年前までの花のついた痕跡は、枝の上に雌花序痕として残されていたのだ。したがって、枝上の雌花序痕と来年の花芽とから、どのブナ林分においても結実予測ができる。それのみでなく、過去に遡って、結実年を知ることも可能となるのである。

この本は 4 部からなり、第 1 部はブナのマスティングの究極要因と至近要因（その現象の生じるメカニズム）、そしてブナの種子食昆虫や受粉の分子生態学といった基礎事項の解説に当てられている。第 2 部がマスティング理論の応用生態学的展開に第 3 部はブナ分布の地史的変遷やブナの生理特性のなどの遺伝的変異などにそして最後の第 4 章はブナ林の現場における施業の実際の紹介やその歴史的変遷の紹介に当てられている。全体を通読すると、応用生態学というものが決して基礎生態学の現場での適用といったものではなく、場合によっては基礎生態学に新しい問題を突きつけ、場合によってはそれを塗り替え、乗り越えて行くものであり、どこが基礎でなにが応用であるかなどと問うことじしんが意味をもたなくなって渾然一体となって発展していく様子がよく理解できる。

本の構成についてはそれなりによく考えられており、理解の助けになる工夫もこらされている。難点を言えば若い執筆者たちの文章がうまく、つい読まされてしまうところである。

森林について学び始めた学生や、生態学を応用するような職に就きたいと考えている若い人たちにすすめる。

（菊沢喜八郎）

J・スコット・ターナー著・滋賀陽子訳・深津武馬監修（2007）「生物がつくる＜体外＞構造　延長された表現型の生理学」342pp. みすず書房　税込価格 3990 円
ISBN:978-4-622-07258-4

原題は *The Extended Organism — The Physiology of Animal-Built Structures* であり、動物がつくる構造物が、生理作用をもつ体外器官といえるのか、突き詰めて考えようという J・スコット・ターナーの試みだ。タイトルから想起されるように、R. ドーキンスの *The Extended Phenotype*（延長された表現型）のアイデアに生理学な機能を「肉付け」するねらいもある。彼はニューヨーク州立大の生理学者で、長年シロアリの研究をしており、その研究の一部は本書の議論の頂点でもある 11 章で詳しく述べられている。

ここで紹介されている無脊椎動物のつくる構造物の具体例は、住んでいる環境や構造物のもつ生理的機能もそれぞれ異なる多彩なラインナップになっている。フラクタルな構造をつくるサンゴの成長は、栄養を含んだ水流との相互作用による正のフィードバックであり、ゴカイの巣穴は酸化還元電位差を利用した採餌のための構造で

あるという。ミミズがつくり続ける巣穴は、多量の水分を取り込むための体外の腎臓となり陸の生活を可能にした。ミズグモの水中ドームは酸素をためこむだけのものではなく呼吸のための補助的な鰓となり、ダニやアブラムシのつくる虫こぶは葉の温度を操作して炭素の流量をコントロールしているかもしれず、ケラの巣穴は鳴き声を増幅する楽器で、シロアリなど社会性昆虫の巣や塚は、ガス交換を可能にするホメオスタシスがコロニー全体として機能している。

本書の構成は、生理作用の概念の理解のため、熱力学の基本の説明に最初の4章があてられ、5章から11章にかけての具体例の話からは、徐々に生理作用の及ぶ範囲を体外へ広げていき、泥の中、土壌中、水中、植物体内、地上での、呼吸や栄養摂取など小さな生き物たちが直面している、それぞれの環境の生理学的な“生きにくさ”を指摘した上で、彼らのつくる構造物を介することで、そこでどんなエネルギーのやりとりが生じるかを論じている。生理学の考え方のベースには熱力学があるので、数式も重要な役割を果たしているが、気体、流体、固体にかかわらずその温度差、濃度差、酸化還元電位差などがあると、その差が小さくなる方向に物体は動いて「仕事」をするので、その残りが熱（エネルギー）として放出される、というポイントをつかめば理解しやすい。そして生理作用がホメオスタシスとして働くならば、どのエネルギーがつりあうことが必要なのかがわかればよいのだ。例えば非常に複雑な、葉の温度と熱平衡の関係が、近似化した数式によって表される。簡単な実験によって得られた、虫こぶがある場合とない場合の葉の温度という数値を代入してシミュレーションしていくと、虫こぶのある葉とそうでない葉での熱伝導効率のちがいが概算できる。既知の作物の純光合成量と葉の温度の関係を使うと、虫こぶ形成による葉の温度変化が炭素流量に与える効果が予測できてしまう。小さな生き物が生きていく上でのエネルギー的な問題が、鮮やかに浮き彫りにされるのだ。各章、あるテーマに沿って注意深く外堀をうめ、準備をととのえたところで、核心にせまっていくスタイルで、多少の推論も含まれているが、大胆な仮説が提示されることもあり、各章の到達点は非常にユニークだ。毎回、どんな結論に行き着くのか、十分に楽しませてくれる。この生理学ベースの見方をすれば（そしてちょっとした計算ができれば）、さまざまな環境で生きている、生物をみる眼が変わりそうである。かくいう私も、ケラという虫とつきあいがあるので、10章の「歌う巣穴」は特別な思いで読んだが、ケラの鳴き穴がいかに音を増幅する構造になっているかという話だけにとどまらない展開に、正直、驚いた。あえて対比するなら、ドーキンスならばきわめて慎重に、また遺伝子ベースで論理を組み立てていくであろうところを、ターナーは生理学的なエネルギー論から論理的に攻めながらも、少しの茶目っ気も含みつつ、ときに大胆に飛躍しており、それがこの著書の魅力になっている。

最後に、進化生物学からは受け入れられない（ドーキンスとも相容れない）ことは承知していると断った上で、ガイア説に話が発展するあたり、妙に力がこもっているのだが、この本の最初の疑問である「生物と環境の境界がどこなのか」というテーマと「動物が作る構造物はまさしく生理作用をもつ体外器官だ」という考えを突き詰めるという、一貫した姿勢によってたどり着くゴールなのだと理解することが必要である。社会性昆虫を扱った11章で、シロアリの塚の内部では、数百万のシロアリや彼らに栽培されている菌が呼吸するにもかかわらず、驚くほど一定の温度、湿度、酸素分圧、二酸化炭素分圧を保っていることから、コロニーでホメオスタシスが維持され、構造物に適応性があるという主張ともつながる議論なのだ。進化論は遺伝子ベースの議論だが、生理学からみればエネルギーの流れは電子のやりとりに還元できる。遠隔共生のアイデアも、エネルギーの流れからみれば突拍子もないことでもなさそうだ。この考えに違和感を持つとすれば、その違和感はどこに由来し、自分の立ち位置がどこなのかを再認識することこそ大事なのではないか。20世紀生物学の目指してきた方向と、たどってきた歴史、「生物」をどのようにとらえるかという立場に様々あったこと、などをふまえた上での、生理学者としての彼の主張だ、と説明されれば、ガイア説を単なる飛躍と切り捨てることはできない。生理学ベースで考えることの重要性に改めて気づかされるとともに、生物学のたどってきた歴史をもっと勉強しなくては、という気にさせられる。個人で手におえないほど広範囲に巨大化しつつある生物学が、本来目指してきたこととは何かという基本的な問題に立ち返るという立場からの発言は、深く、刺激的だ。この本が翻訳されたことを感謝する。

（京都大学生態学研究センター　遠藤千尋）

日本生態学会役員一覧

会長	矢原　徹一	2008.1 ～ 2009.12
次期会長	中静　透	2010.1 ～ 2011.12
幹事長	小泉　博	2006.1 ～ 2008.12
庶務幹事	津田　智	2006.1 ～ 2008.12
会計幹事	肥後　睦輝	2006.1 ～ 2008.12
会計監事	徳地　直子	2006.1 ～ 2008.12
	山内　淳	2008.1 ～ 2010.12

全国委員会

全国区	石濱　史子	2008.1 ～ 2009.12
	伊藤　哲	2008.1 ～ 2009.12
	河田　雅圭	2008.1 ～ 2009.12
	久米　篤	2008.1 ～ 2009.12
	甲山　隆司	2008.1 ～ 2009.12
	齊藤　隆	2008.1 ～ 2009.12
	酒井　聡樹	2008.1 ～ 2009.12
	高村　典子	2008.1 ～ 2009.12
	辻　和希	2008.1 ～ 2009.12
	津田　みどり	2008.1 ～ 2009.12
	半場　祐子	2008.1 ～ 2009.12
	日浦　勉	2008.1 ～ 2009.12
	松田　裕之	2008.1 ～ 2009.12
	宮下　直	2008.1 ～ 2009.12
	吉田　丈人	2008.1 ～ 2009.12
地方区	野田　隆史（北海）	2008.1 ～ 2009.12
	柴田　銃江（東北）	2008.1 ～ 2009.12
	池田　浩明（関東）	2008.1 ～ 2009.12
	井田　秀行（中部）	2008.1 ～ 2009.12
	湯本　貴和（近畿）	2008.1 ～ 2009.12
	中根　周歩（中四）	2008.1 ～ 2009.12
	西脇　亜也（九州）	2008.1 ～ 2009.12

常任委員会

会長（矢原）
幹事長（小泉）

常任委員	池田　浩明	2008.1 ～ 2009.12
	齊藤　隆	2008.1 ～ 2009.12
	西脇　亜也	2008.1 ～ 2009.12
	半場　祐子	2008.1 ～ 2009.12
	日浦　勉	2008.1 ～ 2009.12
	宮下　直	2008.1 ～ 2009.12

次期会長（中静）
ER 編集委員長（河田）
生態学会誌編集委員長（堀）
保全生態学研究編集委員長（湯本）
将来計画専門委員長（可知）
自然保護専門委員長（立川）
生態教育専門委員長（嶋田）
大会企画委員長（永田）
庶務幹事（津田）
会計幹事（肥後）

Ecological Research 編集委員会

編集委員長	河田　雅圭	2008.1 ～ 2010.12
編集幹事	中静　透	2008.1 ～ 2010.12
	占部　城太郎	2008.1 ～ 2010.12
	佐竹　暁子	2008.1 ～ 2010.12
編集委員	市岡　孝朗	2008.1 ～ 2010.12
	岩田　智也	2008.1 ～ 2010.12
	江口　和洋	2008.1 ～ 2010.12
	大園　享司	2008.1 ～ 2010.12
	梶　光一	2008.1 ～ 2010.12
	久保田康裕	2008.1 ～ 2010.12
	工藤　岳	2008.1 ～ 2010.12
	久米　篤	2008.1 ～ 2010.12
	木庭　啓介	2008.1 ～ 2010.12
	酒井　章子	2008.1 ～ 2010.12
	佐藤　一憲	2008.1 ～ 2010.12
	島田　卓哉	2008.1 ～ 2010.12
	陶山　佳久	2008.1 ～ 2010.12
	関島　恒夫	2008.1 ～ 2010.12
	高村　典子	2008.1 ～ 2010.12
	瀧本　岳	2008.1 ～ 2010.12
	仲岡　雅裕	2008.1 ～ 2010.12
	長谷川雅美	2008.1 ～ 2010.12
	原　正利	2008.1 ～ 2010.12
	伴　修平	2008.1 ～ 2010.12
	半場　祐子	2008.1 ～ 2010.12
	彦坂　幸毅	2008.1 ～ 2010.12
	日野　輝明	2008.1 ～ 2010.12
	福井　学	2008.1 ～ 2010.12
	正木　隆	2008.1 ～ 2010.12
	松尾　奈緒子	2008.1 ～ 2010.12
	宮下　直	2008.1 ～ 2010.12
	大塚　俊之	2008.4 ～ 2010.12
	菊沢　喜八郎	2008.4 ～ 2010.12
	清和　研二	2008.4 ～ 2010.12
	Robert Arlinghaus	2008.1 ～ 2010.12
	Michael Boots	2008.1 ～ 2010.12
	Barry W. Brook	2008.1 ～ 2010.12
	Min Cao	2008.1 ～ 2010.12
	Jae Chun Choe	2008.1 ～ 2010.12
	Franck Courchamp	2008.1 ～ 2010.12
	Stuart J Davies	2008.1 ～ 2010.12
	Angus Davison	2008.1 ～ 2010.12
	Tom J. de Jong	2008.1 ～ 2010.12
	Jingyun Fang	2008.1 ～ 2010.12
	Raghavendra Gadagkar	2008.1 ～ 2010.12
	Rhett Harrison	2008.1 ～ 2010.12
	Sun-Kee Hong	2008.1 ～ 2010.12
	John G. Kie	2008.1 ～ 2010.12
	Andrew Liebhold	2008.1 ～ 2010.12
	Mathew Leibold	2008.1 ～ 2010.12
	Simon A. Levin	2008.1 ～ 2010.12

	Mark D. Scheuerell	2008.1 ～ 2010.12
	Janne Sundell	2008.1 ～ 2010.12
	Simon Thrush	2008.1 ～ 2010.12
	Marinus J.A. Werger	2008.1 ～ 2010.12
	Ping Xie	2008.1 ～ 2010.12
	Hoi Sen Yong	2008.1 ～ 2010.12
	David W. Inouye	2008.1 ～ 2010.12
	Erling J. Solberg	2008.1 ～ 2010.12
	Kari Klanderud	2008.1 ～ 2010.12
	Bas W. Ibelings	2008.1 ～ 2010.12

日本生態学会誌編集委員会

編集委員長	堀　良通	2008.1 ～ 2010.12
編集幹事	山村　靖夫	2008.1 ～ 2010.12
	北出　理	2008.1 ～ 2010.12
	森野　浩	2008.1 ～ 2010.12
編集委員	井鷺　裕司	2008.1 ～ 2010.12
	市岡　孝朗	2008.1 ～ 2010.12
	奥田　昇	2008.1 ～ 2010.12
	奥田　敏充	2008.1 ～ 2010.12
	鎌田　直人	2008.1 ～ 2010.12
	木村　和喜夫	2008.1 ～ 2010.12
	古賀　庸憲	2008.1 ～ 2010.12
	小林　剛	2008.1 ～ 2010.12
	近藤　倫生	2008.1 ～ 2010.12
	酒井　聡樹	2008.1 ～ 2010.12
	鈴木　まほろ	2008.1 ～ 2010.12
	辻　和希	2008.1 ～ 2010.12
	津田　みどり	2008.1 ～ 2010.12
	中丸　麻由子	2008.1 ～ 2010.12
	野田　隆史	2008.1 ～ 2010.12
	日浦　勉	2008.1 ～ 2010.12
	彦坂　幸毅	2008.1 ～ 2010.12
	三浦　徹	2008.1 ～ 2010.12
	安井　行雄	2008.1 ～ 2010.12
	大塚　俊之	2008.1 ～ 2010.12
	田中　健太	2008.4 ～ 2010.12

保全生態学研究編集委員会

編集委員長	湯本　貴和	2006.4 ～ 2009.3
編集幹事	椿　宜高	2006.4 ～ 2009.3
	西廣　淳	2006.4 ～ 2009.3
編集委員	石井　実	2006.4 ～ 2009.3
	井上　幹生	2006.4 ～ 2009.3
	梅原　徹	2006.4 ～ 2009.3
	加藤　真	2006.4 ～ 2009.3
	角野　康郎	2006.4 ～ 2009.3
	倉本　宣	2006.4 ～ 2009.3
	小池　裕子	2006.4 ～ 2009.3
	小池　文人	2006.4 ～ 2009.3
	柴田　昌三	2006.4 ～ 2009.3
	高槻　成紀	2006.4 ～ 2009.3
	高村　典子	2006.4 ～ 2009.3
	舘野　正樹	2006.4 ～ 2009.3
	田中　哲夫	2006.4 ～ 2009.3
	中越　信和	2006.4 ～ 2009.3
	中丸　麻由子	2006.4 ～ 2009.3
	長谷川雅美	2006.4 ～ 2009.3
	長谷川真理子	2006.4 ～ 2009.3
	早矢仕有子	2006.4 ～ 2009.3
	藤岡　正博	2006.4 ～ 2009.3
	増田　理子	2006.4 ～ 2009.3
	松田　裕之	2006.4 ～ 2009.3
	安田　雅俊	2006.4 ～ 2009.3
	山本　智子	2006.4 ～ 2009.3
	鷲谷　いづみ	2006.4 ～ 2009.3
	藤井　伸二	2008.4 ～ 2009.3
	三橋　弘宗	2008.4 ～ 2009.3

自然保護専門委員会

委員長	立川　賢一：海洋	2008.3 ～ 2010.3
副委員長	佐藤　謙　：北海	2008.3 ～ 2010.3
幹事	清水　善和：島嶼	2008.3 ～ 2010.3
地区委員	紺野　康夫：北海	2008.3 ～ 2010.3
	竹原　明秀：東北	2008.3 ～ 2010.3
	鈴木　孝男：東北	2008.3 ～ 2010.3
	向井　宏　：関東	2008.3 ～ 2010.3
	吉田　正人：関東・自然公園	2008.3 ～ 2010.3
	井田　秀行：中部	2008.3 ～ 2010.3
	和田　直也：中部	2008.3 ～ 2010.3
	加藤　真　：近畿	2008.3 ～ 2010.3
	角野　康郎：近畿	2008.3 ～ 2010.3
	安渓　遊地：中四	2008.3 ～ 2010.3
	大田　直友：中四	2008.3 ～ 2010.3
	逸見　泰久：九州	2008.3 ～ 2010.3
	伊澤　雅子：九州	2008.3 ～ 2010.3
	鈴木　信彦：九州	2008.3 ～ 2010.3
専門別委員	増沢　武弘：高山・亜高山	2008.3 ～ 2010.3
	竹門　康弘：陸水	2008.3 ～ 2010.3
	久保田康裕：熱帯・亜熱帯	2008.3 ～ 2010.3
	竹中　千里：大気汚染	2008.3 ～ 2010.3
	矢原　徹一：IUCN	2008.3 ～ 2010.3
	村上　興正：環境行政	2008.3 ～ 2010.3
	横畑　泰志：寄生生物	2008.3 ～ 2010.3
	三浦　慎吾：鳥獣管理	2008.3 ～ 2010.3
	陶山　佳久：遺伝子	2008.3 ～ 2010.3

将来計画専門委員会

委員長	可知　直毅	2005.3 ～
副委員長	粕谷　英一	2005.3 ～
	巌佐　庸	2005.3 ～

大橋　一晴　2005.3 ～
酒井　聡樹　2005.3 ～
酒井　章子　2005.3 ～
辻　和希　2005.3 ～
野田　隆史　2005.3 ～
花里　孝幸　2005.3 ～
安井　行雄　2005.3 ～
山内　淳　2005.3 ～
湯本　貴和　2005.3 ～

常任オブザーバー
小泉　博　2006.1 ～
松本　忠夫　2005.3 ～
注）2007 年 4 月以後暫定的に任期を継続

生態学教育専門委員会

委員長　嶋田　正和　2008.4 ～ 2010.3
木村　和喜夫　2008.4 ～ 2010.3
山村　靖夫　2008.4 ～ 2010.3
西脇　亜也　2008.4 ～ 2010.3
林　浩二　2008.4 ～ 2010.3
広瀬　祐司　2008.4 ～ 2010.3
久保田康裕　2008.4 ～ 2010.3
中村　雅彦　2008.4 ～ 2010.3
山路　恵子　2008.4 ～ 2010.3

大規模長期生態学専門委員会

委員長　日浦　勉　2008.3 ～ 2010.3
甲山　隆司　2008.3 ～ 2010.3
佐竹　暁子　2008.3 ～ 2010.3
鈴木　準一郎　2008.3 ～ 2010.3
仲岡　雅裕　2008.3 ～ 2010.3
中村　誠宏　2008.3 ～ 2010.3
三枝　信子　2008.3 ～ 2010.3
大手　信人　2008.3 ～ 2010.3
正木　隆　2008.3 ～ 2010.3
柴田　英昭　2008.3 ～ 2010.3

生態系管理専門委員会

委員長　竹門　康弘：河川　2008.4 ～ 2010.3
副委員長　松田　裕之：管理モデル　2008.4 ～ 2010.3
村上　興正：自然保護　2008.4 ～ 2010.3
中越　信和：景観生態　2008.4 ～ 2010.3
中根　周歩：森林　2008.4 ～ 2010.3
田村　典子：森林　2008.4 ～ 2010.3
鎌田　磨人：森林・河川　2008.4 ～ 2010.3
津田　智　：草原　2008.4 ～ 2010.3
高村　典子：湖沼　2008.4 ～ 2010.3
西廣　淳　：湖沼　2008.4 ～ 2010.3
角野　康郎：湖沼・水田　2008.4 ～ 2010.3
日鷹　一雅：水田・農耕地　2008.4 ～ 2010.3
波田　善夫：湿地　2008.4 ～ 2010.3
神田　房行：湿地　2008.4 ～ 2010.3
加藤　真　：渚・生物間相互作用　2008.4 ～ 2010.3
国井　秀伸：汽水・河口　2008.4 ～ 2010.3
佐藤　利幸：高山　2008.4 ～ 2010.3
矢原　徹一：植物　2008.4 ～ 2010.3
中村　太士：河川　2008.4 ～ 2010.3
立川　賢一：海洋　2008.4 ～ 2010.3
向井　宏　：海洋　2008.4 ～ 2010.3
椿　宜高：個体群　2008.4 ～ 2010.3
嶋田　正和：管理モデル　2008.4 ～ 2010.3
長谷川真理子：科学技術政策　2008.4 ～ 2010.3
鷲谷　いづみ：保全生物学全般　2008.4 ～ 2010.3
塩坂　比奈子：普及　2008.4 ～ 2010.3

公開講演会委員会

委員長　大森　浩二
紙谷　智彦
矢原　徹一
牧　陽之助

日本生態学会賞及び宮地賞選考委員会

柴田　銃江　2006.9 ～ 2008.12
竹中　明夫　2006.9 ～ 2008.12
松田　裕之　2006.9 ～ 2008.12
河田　雅圭　2007.8 ～ 2009.12
齊藤　隆　2007.8 ～ 2009.12
杉本　敦子　2007.8 ～ 2009.12

ER 論文賞選考委員会

（任期は Ecological Research 編集委員会と同じ）

委員長　河田　雅圭
小泉　博
Ecological Research 編集委員

大会企画委員会

委員長　永田　尚志　2007.1 ～ 2010.3
副委員長　宮竹　貴久　2007.1 ～ 2010.3
運営部会　大森　浩二　2006.1 ～ 2009.3
竹中　明夫　2005.1 ～ 2011.3
難波　利幸　2005.1 ～ 2011.3
齊藤　隆　2005.1 ～ 2011.3
中静　透　2005.1 ～ 2011.3
鈴木　まほろ　2007.1 ～ 2010.3
牧　陽之助　2008.3 ～ 2011.3
市岡　孝朗　2008.3 ～ 2011.3
嶋田　正和　2008.3 ～ 2011.3

シンポジウム部会

	陀安　一郎	2006.1 ～ 2009.3
	佐竹　暁子	2006.1 ～ 2009.3
	坂田　宏志	2006.1 ～ 2009.3
	上條　隆志	2006.1 ～ 2009.3
	久米　篤	2006.1 ～ 2009.3
	巌佐　庸	2007.1 ～ 2010.3
	島田　卓哉	2007.1 ～ 2010.3
	田村　典子	2007.1 ～ 2010.3
	大手　信人	2008.4 ～ 2011.3
	榎木　勉	2008.4 ～ 2011.3
	古賀　庸憲	2008.4 ～ 2011.3

プログラム編成部会

	吉田　丈人	2007.1 ～ 2010.3
	箕口　秀夫	2006.1 ～ 2009.3
	池田　浩明	2008.4 ～ 2011.3
	鏡味　麻衣子	2008.4 ～ 2011.3
	柴田　銑江	2008.4 ～ 2011.3
	松政　正俊	2008.4 ～ 2011.3

ポスター発表部会

	村岡　裕由	2006.1 ～ 2009.3
	関島　恒夫	2006.1 ～ 2009.3
	工藤　岳	2007.1 ～ 2010.3
	清水　孝昭	2007.1 ～ 2010.3
	津田　みどり	2008.4 ～ 2011.3
	関川　清広	2008.4 ～ 2011.3
	及川　真平	2008.4 ～ 2011.3
	松木　佐和子	2008.4 ～ 2011.3

国際対応委員会

委員長	中静　透	2005.1 ～
	大沢　雅彦	2005.1 ～
	大園　享司	2005.1 ～
	北山　兼弘	2005.1 ～
	杉本　敦子	2005.1 ～
	小泉　博	2005.1 ～

野外安全管理委員会

委員長	粕谷　英一	2005.1 ～ 2010.3
	大舘　智志	2005.1 ～ 2010.3
	鈴木　準一郎	2005.1 ～ 2010.3
	森広　信子	2005.1 ～ 2010.3
	山下　直子	2005.1 ～ 2010.3
	湯本　貴和	2005.1 ～ 2010.3
	関野　樹	2006.4 ～ 2008.12
	本間　航介	2006.4 ～ 2008.12
	飯島　明子	2008.8 ～ 2010.3

倫理問題検討委員会

	小泉　博	2006.11 ～ 2008.12
	津田　智	2006.11 ～ 2008.12
	鬼頭　秀一	2006.11 ～ 2008.12
	梶　光一	2006.11 ～ 2008.12
	安島　美穂	2006.11 ～ 2008.12

法人化検討委員会

委員長	石川　真一
	矢原　徹一
	中静　透
	三橋　弘宗
	足立　直樹
	小泉　博
	津田　智
	難波　利幸
	鈴木　伸一

京都大学生態学研究センターニュース
Center for Ecological Research NEWS

京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200（代表), Fax : (077) 549-8201
センター長　高林純示

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp

2008（平成 20）年度センター活動予定

生態学研究センターにおける 2008 年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ（http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp）で公開しています。

1．共同研究

2007 年度から始まったグローバル COE「生物の多様性と進化研究のための拠点形成 ―ゲノムから生態系まで―」（研究代表者：阿形清和）（文部科学省研究拠点形成費補助金）、「アジア熱帯降雨林地域における土地利用転換の広域影響把握と社会適応策の構築」（研究代表者：北山兼弘）（日本学術振興会　アジア・アフリカ学術基盤形成事業）、2008 年度から始まった「生物多様性を維持促進する生物間相互作用ネットワーク　―ゲノムから生態系まで―」（研究代表者：高林純示）（日本学術振興会 先端拠点事業 ―拠点形成型―）、また流動連携機関である総合地球環境学研究所との 3 つの共同企画プロジェクトをはじめ、個人レベルでも活発な共同研究が進められている。

2．協力研究員

引き続き、協力研究員（Guest Scientist）を公募する。

3．公募型共同利用事業

2008 年度公募型共同利用事業として、分野間の交流や若手研究者の育成の観点から、以下の 3 件の研究会、3 件の集中講義 & セミナー、3 件の野外実習が採択された。開催の日程などの詳細は、センターホームページに掲載する。

〈研究会〉

1）代表者：仲岡雅裕
（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所：教授）
『生物多様性・生態系機能の適応管理に向けた観測体制の構築』
開催日：2008 年 7 月 2 日～ 7 月 3 日
開催地：北海道大学

2）代表者：大河内直彦
（海洋研究開発機構・地球内部変動研究センター：グループリーダー）
『安定同位体分析による生態系研究の最前線』
開催日：2008 年 8 月 10 日
開催地：芝蘭会館

3）代表者 : 近藤倫生（龍谷大学理工学部：准教授）
『空間構造と食物網』
開催予定日：2008 年 12 月 18 日
開催予定地：京都大学生態学研究センター

〈集中講義＆セミナー〉

1）代表者：椿宜高（京都大学生態学研究センター：教授）
『生物多様性研究の新展開：静から動へのパラダイムシフト（1）』
開催日：2008 年 9 月 16 日
開催地：京都大学生態学研究センター

2）代表者：椿宜高（京都大学生態学研究センター：教授）
『生物多様性研究の新展開：静から動へのパラダイムシフト（2）』
開催予定日：2008 年 11 月 19 日
開催予定地：京都大学生態学研究センター

3）代表者：椿宜高（京都大学生態学研究センター：教授）
『生物多様性研究の新展開：静から動へのパラダイムシフト（3）』
開催予定日：2009 年 1 月 20 日
開催予定地：京都大学生態学研究センター

〈野外実習〉

1）代表者：奥田昇（京都大学生態学研究センター：准教授）
『河川生態系の環境構造と生物群集に関する木曽実習』
開催日：2008 年 8 月 2 日～ 8 月 9 日
開催地：木曽生物学研究所

2）代表者：島野智之（宮城教育大学環境教育実践研究センター：准教授）
『陸上生態系における土壌ダニ類の野外調査法および分類法の習得』
開催日：2008 年 9 月 1 日～ 9 月 5 日
開催地：北海道教育大学

3）代表者：陀安一郎（京都大学生態学研究センター：准教授）
『安定同位体実習』
開催日：2008 年 9 月 8 日～ 9 月 12 日
開催地：京都大学生態学研究センター

4．生態研セミナー

前年度にひき続き、月一回程度（第三金曜日）センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室（会場への道順は、センターのホームページ参照）の予定である。

5．ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に 3 回（7 月、11 月、3 月）発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6．共同利用施設

大型分析機器：DNA 関係では DNA シークエンサー、全自動蛋白質一次構造分析装置、微量蛋白質精製分取装置、蛍光分光光度計、液体クロマトグラフアミノ酸分析計、自記分光光度計、超遠心機など、安定同位体関係ではガスクロ燃焼装置付質量分析計および水同位体比分析用自動前処理装置（MAT252）、元素分析計付質量分析計（コンフロ、delta S）が稼働している。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼動しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：ズートロン、アクアトロン、水域モジュールが運転されている。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤
安定同位体関係：陀安
観測船関係：奥田
シンバイオトロン関係：奥田
実験圃場林園関係：椿

7．協議員会、運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

センターの動向

1）工藤洋氏が 5 月 1 日付けで、神戸大学よりセンターの教授として着任されました。
2）大園享司氏が 7 月 1 日付けで、京都大学よりセンターの准教授として着任されました。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は 1 月から 12 月までです。
新年度の会費は 12 月に請求をします。会費未納者に対しては 6 月、9 月に再請求します。
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256　口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。
会費滞納 2 年で会誌の発送停止となり、3 年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research ＋生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員（選挙・被選挙権）		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については 2007 年度より冊子を必要としない会員への割引（ER 900 円、生態誌 600 円）を開始しました。すでに会員の方が今後申請される場合は 2009 年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。
**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）
北海道地区：200 円　東北地区：800 円　関東地区：600 円　中部地区：0 円
近畿地区：400 円　中国・四国地区：400 円　九州地区：700 円

問い合わせ先：日本生態学会事務局
〒 603-8148　京都市北区小山西花池町 1-8
Tel&Fax 075-384-0250　E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp